忍者がお家にやってきた！

水無月五日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
忍者がお家にやってきた！

【Ｎコード】
Ｎ４２９２Ａ

【作者名】
水無月五日

【あらすじ】
ある日突然、忍者が俺の横でテレビを見ていた。しかもその忍者、俺を君主だの師だと言う。おいおい、待ってくれよこのご時世に忍者なんて居るもんなのか！？普通の高校生に何を求めるんだ、忍者よ…

手前は忍者です。

事の始まりは一通のメールだった。
『ハッピバースディしのぶちゃん。十七歳の誕生日おめでとう。私からプレゼントを送りました、この手紙が着いてしばらくすればプレゼントは届くでしょう。　ー父よりー』
俺の名前は高坂（こうさか）　忍（しのぶ）高校二年生で、十七歳になったばっかりだ。
母は早くに亡くなり、親父は出張中。
ローンの残っているアパートを手放すわけにはいかず、俺は一人家に残る事になった。
２ＬＤＫ。二つの部屋にリビング（居間）ダイニング（食事室）キッチン（台所）がある家のことをこう呼ぶらしいのだが、恥ずかしながら俺は最近まで意味がわからなかった。まぁ、調べる気と覚える気が無かったのだが。なお、バスルーム、トイレ付き。
本当に平凡な家なのだが、俺は気に入ってたりする。
ちょっと難点を言うならば、一人で住むには広すぎる。六畳半の和室と、キッチン、居間ぐらいしか使ってない。生活は主に六畳半の空間で事足りている。
まぁ、俺の生活状態なんて、本当にどうでもいいことだけど。
俺は親父から届いたメールを閉じて、そのまま倒れる。
親父からのプレゼントを貰うのは何年ぶりだろうか。いつの間にか誕生日プレゼントをねだるのをやめたような気がする。
俺はそのまま目を瞑る……そのまま意識は闇へと沈んでゆく。

目が覚めてみれば、辺りは真っ暗で、手探りで携帯を探し、時間を確認。
『１９：３７』
携帯のデジタル時計が現在の時間を指し示す。結構寝ていたようだ。

学校から帰ってきてメールチェックをしてそのまま寝てしまい、晩御飯の準備も当然まだ。
晩飯をそろそろ準備しなくては……そうは思うのだが、まだ頭が働いてないし、いまから何かを作る気にはなれず結局はカップラーメンに落ち着くのだった。
三分待たずに、二分ほどで蓋を開け食べ始める。俺はカップ麺は時間を待たない派なのだ。
半分ぐらい食べたところだろうか？
なにやら視線を感じて後ろを振り向くが、誰も居ない。
当然といえば同然だ。此処で誰か居ればそれはそれで問題なのだが。
俺はテレビを付けて、適当なチャンネルを押す。
番組はマジック特番で、ゲストがそのマジックを見破るという奴だ。
放送ごとにぼちぼちな視聴率らしく、定期的に放送されている。暇つぶしにはもってこいだったりするこの番組。俺も視聴率を上げる要員の一人か。
俺はラーメンを啜りながらその番組を見る。画面の中ではマジシャンが胡散臭くマジックを披露している。
透明なガラスのコップに、ファミレスなどに置いてある灰皿を上に置く。
ゲストの財布から五百円玉を借りる。
どうやら五百円玉が灰皿を貫通して下のコップに落ちるらしい。
マジシャンはそれを紙に包み、オイルライター用のオイルを沁み込ませ、着火。
それを灰皿の上に置く。
それから数十秒後、ことんと五百円玉がコップの中に落ちる。
灰皿の紙の燃えカスを棒で探ってみるが、五百円玉はない。
「すっごいです……」
「ああ、すごい。だがこれはちょっと幼稚じゃない？なんとなくな

らわかったよ」
何気なく俺は会話を交わす。
って、ちょっと待て！！
俺は横を振り向くと、女の子が居た。
「……誰だよ、お前」
俺は横を向き、きちんと正座をして少し前屈みになってテレビを見ている女の子に聞く。
女の子の格好は何か変。どこら辺が変かと言うと……
なんかやらせっぽい格好というか、安いＡＶ女優が着ている衣装というか……。
「な、貴殿にはこの『壁抜けの術』を見破ったのですか、手前には全く……」
女の子はぎゅっとスカートの裾を握り締める。
スカートは結構ミニスカだな。
「いや、これ灰皿の裏に予め蝋を一滴、二滴垂らして五百円玉をくっつけてたんだろう？　ファミレスとかに置いてある灰皿、裏が窪んでいるからさ、そして駄目押しは紙を燃やすとこ。明らかに熱を加えてるからね。そう考えればこれが一番ありそうだって。」
俺はテレビで見たままを説明する。
テレビではマジックのネタばらしに入ったようだ。
「ビンゴ。な、正解だったろ？」
俺はカップラーメンを平らげてそう言った。
「お、大当たりです…手前には全くわかりませんでした…」
女の子はスカートを握り締めそう言った。
何度も言うが、スカートはミニ。
「で、言っていいかな？　というか、今まで待ったからいいよね？」
俺はテレビのスイッチを消して言う。
「お前、何者？　そして何処から入った？答えによってはすぐさま三つのボタン押すぞ。時間を争うならば、電話帳で調べて直接電話

を署に掛けるが。」
俺は、女の子に聞いた。
女の子の答えは……。
「まず、手前は『忍者』です。で、ちゃんと玄関から入りました」
女の子はさっと肩膝を上げ、もう片方の膝を地面について、地面に着いた足の少し前に拳をつく。
そして余った片手を腰骨の辺りに手の甲を添える。
確かに忍者っぽい。
で、玄関から入った！？　馬鹿を言うな。
家に入って一番にする事はドアの鍵を掛ける事だぞ。
ドアノブを引いて、後ろ手で鍵をひねったぞ。
俺のあとにぴったりくっついていたのなら話は別だが、まずそんなのに気が付かないほど俺は老いちゃいない。
「いや、玄関鍵閉めてたから……」
俺はポケットから携帯を取り出す。
女の子は腰骨の添えてあった手を顔の前に持っていき、人差し指を立て眉間に当てる。
そして女の子はこう言った。
「手前には忍び術がありますから」

これからだ。
俺の生活が変わってしまったのは……。

手前は忍者です。（後書き）

上手くなるには書け、書きまくれ！！
という事でひたすらがんばる水無月五日です。
ラヴコメかコメディーかまたわからんものを書いています。
お付き合いいただき、誠にありがとうございました。

手前は桜花です。

忍者！？

俺は自己紹介としては久しく聞いてない単語を聞いて驚いている。

というか、自己紹介で忍者と言った奴を見た、聞いたのは初めてだ。

「で、『自称』忍者さん、いくらなんでも無茶なんじゃないの？

今の時代、忍者なんて居やしないって……」

俺は本気で警察に連絡するべきだと考え、携帯を開き電話する準備をした。

だが、此処で電話したら危ないか。一応こいつがどんな行動を取るか見定めなきゃいけないな。

そうなってしまって動くのであれば遅いのだろうけど。

どちらにせよ良い選択は出来そうにないっぽい。

「で、あんたなんで家なんだ？　他にも忍び込む家とかあるだろう？」

俺は一応、目の前の女の子が忍者であるという事を信じて聞いてみる。

「え、此処は『高坂殿』のお住まいですよね？　高坂　刃殿（こうさかやいば）の…」

女の子は懐から携帯を取り出す。

目の前の女の子の格好はなんというか……ミニスカ忍者？

くのいちと忍者を足して二で割って、ミニスカにしたという格好かな？

忍者とかの格好は時代劇を参考にしてみた。

というか忍者が携帯持つな。

鳩を飼え、手紙を手書きで書け、情報は自分の口で伝えろ。

で、刃というのは俺の親父の名前で、ちなみにお袋が心（こころ）という名前だ。

そこ、笑うんじゃないよ。

「ああ、その名前の知り合いは居るな…しかも親族で。で、そいつ

がお前さんに何を言った、何をした？」
流石にぱっと見、十五～十八の娘さんと結婚はないだろう……。
親父にそれぐらいのモラルがあると信じたい。
もしや援交！？
俺が親父に対していろんな疑惑を考えていると……。
「あの、高坂殿？　ちょっと貴殿の考えていることとはちょっと違いますよ」
なに、こいつ読心術が使えるのか！？
流石は忍者だな。
…じゃなくて！！
顔に出ていただけでしょうが…俺！！
しっかりしなさい、俺！！
「それは、まだ手前が未熟だった頃……今でも未熟ですが。とにかく、修行中に食べ物を全て駄目にしてしまい、危うく餓死するところに、刃殿が救いの手を手前に」
女の子は拳を握り締め、涙ながらにエピソードを語っている。
泣くとこなのかと無性に突っ込みたい衝動に駆られたが、此処は大人しく我慢だ。
「そして、何とか第一段階の修行を終え、刃殿に一食分の恩を返そうと……あ、今手前は修行の第二段階目です。それで、恩返しをしようと刃殿の所を訪ねたら、一人で暮らすご子息が心配だと言い出して、手前の第二段階目の修行をかねて息子の所へ行ってくれと言われたのです！！」
親父、つまりは俺に厄介を回したのか。
こいつはお礼を断っても『お礼させろ』って五月蝿そうではあるが、それを息子に回すかよ、普通。最低な父親を持ったものだ。
それよりも気になったことが。
「いくつか聞いていいか？　まず一つ、その修行って何だ？　二つ目、修行場所離れていいのか？　最後に、ギャグじゃないよな？」
他に聞くことあるのだろうが、なんかどうでもよくなってきてい

る。
「えっとですね……修行は忍者としての修行です！　第二段階目は心の修行で、人と係わりながら心を鍛えます！　だから連絡さえ出来れば何処でもいいのです。最後の質問は……ギャグ言ってどうするんですか？」
どうやら本気で言っているようだ。
ギャグであってくれたならどんなに楽だったか。
「で、その恩返しってのは何をやるんだ？」
なんかもう、『非』現実的な会話になじんでいる自分が嫌だ。
「えっと、ですね、手前が高坂殿の生活を手助けします！！」
どんっと胸を張って胸を叩き、咳き込む女の子。
「いや、今のところ生活は大丈夫だよ。うん、ありがとう、こうやってお話できたのが恩返しだ」
なんか本能が、遺伝子が俺の危機を知らせている。
こんな『非』現実的なことに係わってはいけない！　そんな気がする。
「いや、でも手前はまだ恩返しをしていません！しかも食生活だってカップラーメンとは偏ってますよ！！」
む、痛いトコ突かれたなぁ。
ん、そういやこの子の肩のとこ、今動いたぞ？
注意してその物体を見つめる。
何かついてるな……クモかな？
足が一杯あって、ひょうたんのようなボデー。間違いなくクモだ。
「ちょっとじっとして」
俺は急に女の子を停止させ、女の子に近づく。
「いや、ちょっと高坂殿……なんですか！？」
女の子は赤くなり手を振る。
「ちょっと、動かないで」
俺は女の子の腕を握り、肩に手を伸ばす。
女の子は真っ赤のまま目をつぶる。

「い、いきなりそのような行為は……で、でも手前は高坂殿がどうしてもというのなら」
ひょいっと肩に付いていたクモを回収。小さいけど精一杯生きていて、なんだかしっかりしているような姿のクモだった。
「ほら、肩にクモが付いていたんだよ」
俺は女の子にクモを見せる。
とたんに顔が青くなる女の子。
「い、嫌です！　抹殺です、今すぐに！！」
懐から短刀を取り出し、小指の先ほどのクモを殺そうとする。
「いや、ちょっと待てーーーッ！　殺すな、夜のクモは殺すなと言われてるだろう！　一寸の虫にも五分の魂！？」
俺は急いで外へ出て、階段を駆け下り、草むらにクモを解放する。
俺はクモに心の中で『危なかったな、くっつく相手は選べよ』と語りかける。
ちょっと遅れて女の子が俺の後ろに立っている。
しまった、寂しい人間だと思われたか！？
「まぁ、小さい生き物だからってあんまり殺すのはいけないよ」
俺は笑いながらそう言って、抜き身のままになってる短刀を取り上げ、鞘に入れて女の子に返す。
短刀を受け取った女の子は……。
「感動しました、手前はまだまだです、さすが噂どおりのお方です！！」
何の噂なんだろう？　とりあえず気になるが聞きたくない噂だろう。
「で、結局のトコ断ってもお前さんは俺の周辺に居るんだろ。その『恩返し』ってのをやらない事には気がすまないんだろう？　でもな、何をしてもらうとか、そういうの全部保留でいいかい？　事が大きすぎて一日じゃ決められないよ。それが決まるまでは勝手に何をしてもいいから。携帯の番号教えといて、決まったら連絡するから」

女の子は携帯の番号を言う。
そして決意に満ちたまなざしでこっちを見ながら口を開いた。
「決めました！手前は貴方を主、主君、時には師として仕えます！これを行うのは私の勝手ですので、断られても行います！！」
そうきたか。
チクショウ、こりゃ上手い事言いくるめられちまったな。
「はは、わかった。参った、こりゃ降参。君の思うように行動しなよ」
俺は両手を上げて笑う。
こんな非現実な事が実際にあっても別にいいか。
「俺は忍。高坂　忍って言うんだ。忍者のお前さんの名前はなんて言うんだい？」
手を差し出して俺は女の子に聞く。
女の子は肩膝を地面付け、片手の拳を地面に着け、腰に手の甲を添えるポーズを取り……。
「手前は桜花（おうか）と言います、忍殿」
ちょっと堅苦しい彼女に俺は『友好の握手を求めてるんだ、手ぐらい握ろうよ』と言って握手をし、そのまま手を引いて立ち上がらせる。
こんな大変な事を後先考えずに決めてしまったのは、周囲には平然と一人で居ても『寂しくない』と振舞っていても、実際は『寂しい』と心の隅、頭の隅で感じて、考えていたからかもしれない。
色々と考える事はあるが、それこそ全部まとめて保留する事に決めた。
自分の出した答えに後悔しないように。

手前は桜花です。（後書き）

さて、ようやく忍者の名前登場。
どうも、水無月五日です。
不安な感じでスタートしたこの作品、どうなるのやら…
読んでいただいた皆様には感謝感激です。

手前には家族が居ません。

桜花と名乗る忍者が家に正式に住み込むように決まった夜、忍者と関わって俺に被害が無いのかを問い、多分ないと言うことを聞き、少し安心した。

だが、問題はその深夜だった。

俺は自分がいつも使っている六畳半の畳部屋に入り、寝ようと明かりを消したのだが、なにやらもそもそと何かが入り込んでくる感覚が。

俺は明かりを点けて目を見開く。

其処には忍者が居た。

多分、ギャグマンガなら建物が愉快に空中に浮くような演出がされると思えるほど声を張り上げた。

「桜花、お前にはちゃんと四畳半の部屋を与えただろう！！それでは不満なのか！？」

俺は半身を起こし、桜花に四畳半の部屋に戻るように言う。

「いや、手前は……そうです、主の寝込みを襲う輩が居るかもしれませんから、忍殿の身の安全を！」

わたわたと手を振りながら桜花は言う。

いや、寝込みを襲うって……一番に襲ったのは桜花だろう。

「俺の安全はいいから、それよりも俺の理性のことを心配してくれよ……さっきのは、天使の不意打ちで悪魔が負けたが、次はどうなるかわからないからな」

何とか脳内戦闘で悪魔を打ち倒した天使を褒めつつ、あっさり負けてしまった悪魔に次はがんばれよと激励して、俺は桜花に向き合った。

「あのな…俺は誰かに命を狙われるようなことは今のところしてないから、付きっきりにならなくても大丈夫だよ。というわけで自分の部屋に戻れ」

そう言うと俺は指を四畳半の部屋の方向を指して言う。
桜花は少しおろおろしている。
なんか様子が変だな。
なにやら四畳半の部屋に戻るのを嫌がる桜花。
忍者だから何か見えるのだろうか？　例えば幽霊とか…そのほかもろもろが。
いや、しかし忍者は忍者であって霊能力者ではない。だが昔の忍者は陰陽道を究め、体得していた者も居ると聞く。
その可能性があっても不思議ではないな。
「どうした、桜花？　もしかして幽霊とか悪霊とかそんなのが四畳半の部屋に居ると言うのか！？」
俺は前屈みになって桜花の顔を覗き込む。
「じ、実は…手前……」
桜花が恐る恐る口を開く。
俺は思わずツバを飲み込む。
「一人じゃ寝れないんです！暗い中に一人で長時間居るとかあり得ません！！忍者養成学校でもルームメイトが寝るときにはそばに居たし！」
俺は『こて』っと前屈みのまま、倒れた。
忍者が暗闇怖いって何だよ……忍者が一人で寝られないって何だよ……というか一人で寝られないのは忍者じゃなくても問題だぞ。
「どうかお願いです、手前を一人にしないでください、忍殿！！」
桜花は倒れた俺の手を取り、ひたすら懇願している。
とはいっても…一晩中女の子がそばに、しかも手が届きそうな位置に寝ていると流石の俺も。
「いや、とはいっても、一緒に寝てたり、川の字…というか二の字だな。兎に角そんな状態で寝ていて、間違いが起こらないとかそういう自信、俺にはない！！」
ちょっと情け無いが事実だ。
健全な男児ならば。

「手前はそれでも一向に構わないのですが……そうだ、押入れで寝ます、手前！！」
桜花は俺の寝床、折りたたみベッドの後ろのふすまを開けてそう言った。
ネコ型ロボットか、お前は。
「ほら、一応個室ですし……」
押入れの中には上下段、何も入れてなく無駄な空間になっていたのだが、こういう形で利用することになるとは思っていなかった。
というか押入れを個室と思って良いのだろうか。
数分後、桜花は自分の寝具を持って押入れの中に移住完了。
『俺、なんか桜花に振り回され始めてないか』と密かな疑問が生まれ始めていたことは言うまでもない。
俺は西に頭を向けて、足先側のふすまを少し開けてやった。
流石に朝起きて隣で死人が寝てたとかなったらいやだもんな…
俺はその後、ふすま越しに聞こえる吐息が耳から放れず、なかなか寝付けなかった。

翌朝、エプロンをした忍者に起こされた。
忍び装束にエプロンって何だよ。
微妙に似合ってると思いつつ、寝癖で跳ねた髪もそのままで居間へと移動する。
本日は土曜日。
先日、夜まで寝てしまったことを後悔しなかったのは今日、明日が休みで、自由な日であるからだ。
そして俺は昨日できなかったことをするために、携帯を開いた。
メモリーからとある名前をプッシュ。
『トゥ…トゥ…トゥ…』と呼び出し待機音が流れている。
この電話の向こうでは、喧しく呼び出しメロディーが流れているであろう。
サブ液晶には俺の名前が表示されてると思う。

なかなか出ない呼び出しを待ってる間、俺はそんなことを考えていた。
そして忍者はテレビの音を小さくして雑音が入らないように気を配ってくれてる。
流石、現在で生きる、時代錯誤の日本代表だ。
待つ事数秒、呼び出し音が途絶える。
どうやら呼び出しに答えたようだ。
電話口では『もしもし』と相手が言っている。
俺は耳から携帯を離し、顔の前に持っていき…
「何考えてんだクソ親父！！」
俺は朝から自分の限界ギリギリまで声を張り上げ、怒鳴った。
そして普通の会話スタイルに戻る。
「酷いよ忍ちゃん……鼓膜が……朝からそれはきついんじゃない？」
多分電話の向こうでは親父が右耳に当てていた携帯を左耳へと当て変えて、応答しているのだろう。
「御託はいいからプレゼントってこれか？　あと『ちゃん』で呼ぶな」
俺は横目で朝のニュース番組を見ている桜花を見ながらそう言った。
「うん、そうだよ、一人暮らしは孤独だからねぇ、忍ちゃんの歳ならなおさら、誰かそばに居ないといけないからね」
親父は何事も無かったかのように言う。
「それが二年以上ほったらかしにしてた奴の言う事か！　俺が中学三年の時に出て行きやがって、心配なら年に三度のメールだけでなく電話ぐらいしろ」
俺は久々に聞く親父の声に少し嬉しくなりながらそう言った。
ある程度適当に親父に近況を報告して電話を切り、桜花に向き合った。
「で、忍者の修行って何すんだ？」
俺は今回の通話時間を見ながらそう質問した。

「さぁ、わかりません。定期的にメールを入れて、ある程度時間が経ったら二段階目の修行の合格か不合格かのメールが届くみたいです、合格すれば三段階目の修行に……」
だが、このご時世に忍者になって、職はあるのだろうか。
何とか党と何ぞと党との議論での攻めの物証でも探すのだろうか？
それとも、他国へ行って隠蔽している疑惑の解明の物的証拠でも見つけるのだろうか？
どちらにせよ、とんでもない世界だと思う。
親御さんはよく許したよな。
俺は一人でそんなことを考えていた。
「あれ、そういや桜花、お前の親はこの事知ってるのか？」
俺が親だったら絶対にこのようなこと許さないが。
実際この事を桜花が親に黙ってて、ある日突然、俺の家に怖いお兄さんが訪ねてくるのは避けたい。
「手前には親は居ません……」
桜花はうつむいてそう答えた。
気まずい空気が流れる。
「わ、わりい。変な事聞いてさ……め、飯食おうぜ、飯」
俺はこの空気に耐え切れず、話題を変える。
桜花は『そうですね』と微笑み、台所へと消えた。
そして桜花は次々に朝ごはんを運んでくる。白飯と味噌汁、目玉焼き、ハム、ソーセージ。一般的な朝ごはんだ。
意外にその味付けは美味く、いつもなら朝であまり飯が入らないのに、自然と箸が進んだ。
「忍殿」
桜花は俺とは対照的であまり箸が進んでないようだった。
「手前は『友達』と暮らす事は知っていても、『家族』と暮らす事は知りません。忍殿のように、何かあればああやって何か言い合える人が居るという事は羨ましいです」
桜花は俺と親父とのやり取りを羨ましそうに見ていたのかもしれ

ない。
　なんとなくだが俺は桜花の『一人の寂しさ』が少し感じ取れたように思えた。それは唯の勘違いかもしれないが、俺は気がつけば口を開いていた。
「なら、何か言いたい事、嬉しかったことがあれば俺に言えば良いだろ。こんな形とは言え、知り合ったのは何かの縁で、それぐらいならばしてやれるし、困った事があるのならば力になってやれる。こんな崩壊寸前の家族の食卓のような雰囲気よりもっと楽しそうな家族の雰囲気出そうぜ」
　俺は白飯を口に運びながらそう言った。
　桜花は何か驚いたような顔をしていたが、『ハイ！！』と元気よく返事をした。
　平凡ではないが、いつかこれが平凡な風景になるのだろう。
　朝はそんな清々しい気分、気持ちで居ていられられたのだが、それは昼のサイレンと共に見事に崩壊した。

手前には家族が居ません。（後書き）

ん～ラヴでコメディな展開になりそうですが、がんばってギャグに持って行きます。
どうやってもう少し雰囲気を変えようか悩んでいます。
自己中的なキャラ居ればそいつを基点にできるんですけど…
兎に角、呼んでいただいて有難うございます。
また次回もがんばります！！

拙者は霧雨。

休みの日に早起きをしたはいいが、やることが無く、結局は春の日差しを浴びながら自分の部屋で横になるぐらい。
桜花も桜花でやることが無く、ごそごそと荷物を漁っている。
上半身を起し、荷物を漁っている後姿に問いかける。
「桜花…普通上の段で寝るんじゃないの？　下の段には入りにくいと思うけど」
何故かネコ型ロボットのように押入れの上の段で寝らずに、下の段で寝るのだ。
しかも、押入れの前には俺が寝ている折りたたみベットが置かれてあって、下の段に入る隙間は結構小さい。
そんなことなら、素直に上の段で寝たほうがいいと思うのだが。
「いえ、大丈夫ですよ忍殿」
荷物を漁りながら桜花は言う。どういう基準で大丈夫なのだろう？
「よし、ありました！！」
桜花は自分の荷物の中からお札のようなものを取り出した。
「何それ？　日本語じゃないような文字書いてるけど…」
俺は上体を起こして桜花の握り締めているお札を見る。
「これはですね、生き紙と言いまして……ある忍法で使う道具の一つです」
「へぇ、流石忍者。その忍法やってみてよ」
俺は何気なくそう言った。
「で、では、いきますよ」
桜花はそう言うと、深呼吸をし、札を右手の人差し指と中指で挟み、顔の前に持ってゆく。
「臨・兵・闘・者・皆・陣・裂・在・前！！」
おお、九字を切り出したぞ！！
流石は忍者！！

「忍法、生き紙の術！！」
桜花はそう叫ぶと、札を投げた。
ひらひらと部屋を舞う札。俺たちの視線はその札を追い、終いには畳にぽて。
「今のが『生き紙の術』なのか？なんかすげーなんともない術だったなぁ」
「あれ、おかしいですね……九字間違えたかなぁ…」
二人してお札を見続けるが、変化無し。
桜花はエプロンを着けて晩飯の準備に入ろうとするのだが、食材が無く、買い物に行く事になった。
桜花は忍びスタイルで街へ出ようとするので、俺は必死にそれを阻止。
俺のシャツなどを貸して、街へ出ることに。俺はお家でお留守番。

桜花が家を出て数分後、まだ昼飯を食べたばっかりだという事を思い出した。
桜花の晩御飯の時間って何時からなんだろうか？
明らかに早すぎる桜花の行動に額を押さえつつ、俺は居間でテレビを見ることにした。
テレビでは、サスペンスもののドラマがあっていた。
何故か普通の人っぽいおばちゃんたちが犯人を見つけていくというなんともありきたりな話で、そのくせ『7』と結構なシリーズものになっているようだ。
ちゃぶ台に頬杖を突き、テレビを見ている。
俺は視線を感じて後ろを振り返る。
振り返った先には……誰も居ない。
昨日もこんな事があったなぁ。既視感（デジャヴー）って言うんだっけ？
「うわ、此処で殺しか！！」
「ああ、犯人最有力候補の男が！！」
いや、部屋に居るのは俺だけのはずだが。買い物に行っている桜

花の声とは少し違う。
俺は声のしたほうを見ると……
其処には女の子がちゃぶ台に座っていた。
「お前……誰？」
頭を押さえて俺は女の子に聞く。
前にも同じようなこと無かったか？
とりあえず、おかしいのはその女の子のサイズだ。
携帯ゲームやテレビのリモコンほどの大きさなのである。
明らかにおかしい。
「人にものを尋ねる時はまずは自分から！！」
女の子はぴょこんとちゃぶ台の上で立ち上がり、飛び跳ねる。
「うぐ、ちびっ子い癖に…正論を……」
俺は目の前に居る女の子に敗北感を抱きながら答える。
しかし、何者かを聞く時はいいが、道を聞く時はどう聞けばいいのだろう？
まずは自分から
『へぇーい、私はA町から来た者ですが、C町に行くにはどうしたらいいデスか～』
少し外の人入ってしまったが、これでは変な人である。
何故道を聞くのに、自分の住んでる町を言うのか。
俺は女の子の質問そっちのけで考えていた。
「こら、自分で聞いておいてその態度は何かーッ！！」
女の子は頬杖を突いている腕をげしげしと蹴る。
おーけー。
まずは目の前のことから考えようか。
今、俺の目の前には携帯ゲームや、テレビのリモコンほどの大きさの女の子が居る。
明らかにおかしい大きさである。
俺は『忍者』の存在は先日認めたが『妖精』の存在は認めてない。
俺はまだしつこく腕を蹴っている女の子の襟あたりを人差し指と

親指で摘み、顔の前まで持ってくる。
「こら、何をする、無礼者！！」
ちっさい女の子の姿は…刀持った巫女さん？
またＡＶ女優が着てそうな安っぽい衣装だなぁ。と思いつつも、顔の前で暴れる女の子を観察する。
「で、結局は何者よ？」
「だから、人にものをたずねる時は、自分から……」
玩具のような刀を抜刀して暴れるちっこい巫女さん。
こいつ、今自分がどんな現状にいるかわかってないのでは？
「ほぅ…自分の立場がよくわかってないようだなぁ……」
「な、何を申す！！」
俺はにやりと笑う。
ちっこい巫女さんは刀の切っ先をこちらへと向ける。
「せい、喰らえ、大回転！！」
俺はそう叫ぶとコーヒーに入れたミルクをかき混ぜる時のような手つきでちっこい巫女さんを振り回す。
「や、やめろ！！無礼者！！」
そう叫びながらちっこい巫女さんは刀を落としてしまった。
「ん、もっとスピード上げて欲しい？」
俺は回転をストップさせて聞く。
「ひへ…もうかんへんです……」
多分、ちっこい巫女さんの頭の上ではお星さまとひよこちゃんが飛んでいるであろう。
「で、何者なのさ……」
俺は三度目の質問をする。
「拙者は生き紙の術で命を吹き込まれた霧雨（きりさめ）と申す者で……」
くらくらと頭を回しながら霧雨というちっこい巫女さんは言う。
生き紙って…さっき失敗した術じゃんかよ…。
「つうことは、お前元は紙？」
俺はあのお札を思い浮かべながら聞いた。

「拙者はあの札を媒介に……」
訳のわからん単語が出てくる。
此処の間の台詞は中略させていただく。
「というわけで、わかったか？」
えっへんと腕を組みながら霧雨は言う。
「ぜーんっぜんわからん！！」
俺も負けじと腕を組みながら言う。
「…馬鹿？」
霧雨は物凄いむかつく顔でそう言い放った。
「あーこんなのところに埃がー」
俺は白々しく言うと、霧雨を摘み上げ、小物入れに指してあった耳掻きを手に取り、裏についてるもふもふしたもので霧雨をくすぐる。
「やめっ…ひはぁッ！　脇ッ！！」
霧雨は悶えながら必死に抵抗している。
「もう一度、説明たのむー」
俺は棒読みでそう言いながらも、くすぐりの手は休めない。

「へー、つまりはあのお札から出てきた式神みたいなもんねぇ」
俺は頬杖を付いてちゃぶ台の上で息を整えてる霧雨に言う。
「ひ、卑怯者！」
はぁはぁと肩で息をしながら霧雨はまだ言う。
「まーだわかってねぇようだなぁ」
俺はがたんと席を立つ。
「ひぃッ！！」
霧雨は大分びびってるようだ。
まぁ、あれだけやりゃ当然かな。暇だからってちょいといじめすぎたかな。
俺は酒用のちっこいコップに茶を入れて差し出す。
「ほら、これ飲めよ」

「とか言って油断させて！　毒でも、盛っているんだろう！！」
其処まで嫌われたかー、俺。
「いや、毒なんて盛るかよ」
「さては睡眠薬か！薬で眠らせてあんな事やこんな事…拙者にする気だろう！？」
霧雨はまた抜刀し、刀の切っ先を俺のほうに向けて言う。
「だーれがお前みたいなぺったんこ相手に変な事するか」
俺は『ふ』と鼻で笑う。
目の前に居る霧雨は確かにぺたんこ。
「ぶ、無礼者！　私の身体は主である桜花様をベースにしているのであって、拙者の胸が小さいとかぺったんことか、えぐれてるなんて言ったら、其れ即ち、桜花様に言っているのと同じ事だぞ！！」
霧雨は必死に無い胸を強調しながら言う。
「お前が一番言ってはならない事を言ってると思うぞ」
俺は確かに桜花も胸無かったなぁ…と思い出しつつ、墓穴を掘った霧雨に言った。
霧雨と遊んでるうちに日はすっかり暗くなってきた。
居間で大人しくテレビを見ていたが、其れも飽きて、友人にメールを打つために、六畳半の部屋に戻った。
何故か霧雨も俺の後ろを付いてきていたが、まぁ気にする事もないか。
俺はなれた手つきでパソコンを起動させ、これまた慣れたタイピングで文字を打つ。
「お主、唯の性格の悪い男と思っていたが、思わぬ特技があるんだな」
パソコンの変換キー付近に座っている霧雨はそう言う。
性格の悪いっておい。
しかもすげージャマなとこに座ってんのな、お前。
「もしかして、やって見たいとか？」
俺はメールを打ち終わり、クリックを押して、送信後、霧雨に聞

いてみる。
「いや、そういうわけではなくてだ……」
霧雨がそう言いかけたとき、部屋の照明が一気に落ちる。
「またかよ……」
ブレーカーが落ちたようだ。
此処最近、隣の家の電圧アップ工事のせいか、やたらとブレーカーが落ちる。
俺はやれやれと腰を上げる。
「ちょ、ちょっとまて！　何処へ行くつもりだ、馬鹿者！！」
暗闇の中で霧雨が叫んでいる。
「いや、ただブレーカーを元に戻しにさ……」
「それならば拙者も連れて行け！　お主じゃ届かぬところも拙者なら！」
霧雨は俺の答えも聞かずに手から肘、肘から肩へとよじ登ってくる。
いや、お前なぁ。
「俺より何倍も小さいお前が……」
俺は突っ込みたかったのだが、其れを喉元でこらえた。
そういや桜花をベースにしているみたいだから、これぐらいはしょうがないのか。だが、ちょっと数段階パワーアップしているように思えるのだが。
霧雨は俺の襟足のとこの髪を掴んで、鎖骨に足を乗せている。
はぁ…最近の俺ったら何してんだろう。
ばちっとブレーカーを上げると、明るさが戻ってきた。
そして、電子音が色んなところで鳴っている。
「おい、明るくなったから降りろよ」
俺は肩に座ってる霧雨に言う。
「案外此処の座り心地がいいのだ」
そう言って動こうとしない。
そしてそのまま桜花の帰りを待つことに。

俺は高坂忍。忍者の主であり、肩には式神が座ってる。
もうなにがなんだか。訳のわからない自己紹介が出来る自分が悲しい。
にしても時間が掛かりすぎのような気もする。今度からは俺が買い物に行こうと決意し、空腹になった腹の虫とバトルを開始。

拙者は霧雨。（後書き）

というわけでいい玩具なキャラが登場したわけで…
このシリーズもがんばって書いてゆきます！！
では、今回もお読みいただき、有難うございます！！

俺の休日。

俺は本日、日曜日を満喫するつもりだった。
高校生の俺が考える休日を満喫したと思えるのは次に挙げる例である。
まず、昼前又は昼過ぎまで寝る。
これは休みの日の正しい満喫の仕方だと思う。
そして、暇そうな友人宅に乗り込む。
で、早めに風呂に入ってリラックスをする。
大抵風呂に入るのは夜で、窓から外を見ても、つま先から身体を洗ってもなんかいつもと変わらない。だが、夕方ぐらいか、十六時頃に風呂に入ると全く違った気分になれるのである。
逆に、無駄にしたと思える日曜日の過ごし方は……
まず、寝過ごして起きたら夜だった。これは経験した方も多いだろう。
次に、親族に無理矢理どこかへ連れて行かれる。
例えば、買い物に行こうとか、ドライブに行こうとか。

「忍殿？　どうなされたんですか？」
俺の横を歩いている忍者が聞く。
いや、今はシーパンにシャツにジャケットを着ていて、そこらを歩く同年齢の女の子と外見　は変わらないから、どちらかといえば密偵？
まぁ、俺はそんなに忍者の種類には詳しくないから、正確にどう呼ぶかは自信ないけど。
「こらこら、コーサカきびきび歩けぇい♪」
そして、生意気にも人のワイシャツの胸ポケットに入ってるお荷物が急かす。
「おい、霧雨。お前、自分の足で動かないで運んでもらってるんだ、

感謝しろ、俺に。というか移動賃とるぞ、このやろう」
俺はジャケット下のワイシャツに入ってる式神に言う。
「な、何を申す、コーサカ！！お主の様に拙者はでかくないのだ、お主の何気ない一歩は、拙者にとっては大きな一歩で、私の一歩は小さいが、人類にとっ……」
「船長オツカレ」
話が長くなりそうなので携帯のバイブレーション起動、胸に押し当てて五月蝿い式神を黙らせる。
「しっかし、桜花をベースにしているこいつは、どっからどー見ても桜花をベースにしたとは思えないんだけどさ」
俺は桜花を見る。
そして一部分だけ見て、ふっと鼻で笑う。
「さっきの笑いは何だ！？　拙者達に対する侮辱か！？　脂肪が多い娘子のどこがいいのだ！！」
霧雨は自覚があるらしく、俺の胸をつまむ。
ベースの桜花は、自覚がないらしく『何のこと？』といった顔で自分と霧雨を見比べてる。
「はぁ、なんでこんな日曜日に二人と一枚で買い物に行かなきゃならねぇんだよ」
俺は右手で頭を掻く。
そう、事の始まりは俺が買い物に行こうとした時だった。
俺が外に出るよう着替えてると、霧雨が桜花の部屋……まぁ、押入れだが。
とにかく、其処の戸を開けて、上半身裸の俺の身体を見て絶叫。
その叫び声を聞いて桜花が部屋に入ってきてまた絶叫。
子供じゃないんだから男の上半身裸見て叫ぶなよな。
そんなのでは海に行けやしないぞ…と思いながらも外に行く旨を話した。
すると、霧雨が『拙者も連れてゆけ！！』と駄々こねて、それを見て桜花は『主の街徘徊時には影となって付いてゆき、危険から守

ります！！』と言い出して。
気がついたらこの状態。
まずは桜花に一つ。
お前影だろ、実態の横歩くなよ。
そして霧雨に一つ。
お前自力で歩け。
まぁ、声には出せないけどさ……
ほら、色々と五月蝿くなるからさ。
「あ、此処です忍殿！！　昨日、不覚にも迷って辿り着くのに時間が掛かった建物は！！」
桜花は眼前にそびえ立つ建物を指差して言う。
「ふむ、こんなに入り組んだある場所にある隠れた店か。さすが拙者が見込んだだけのことはある」
霧雨はうんうんと一人頷き言う。
お前らアホの子か？
このデパート、家の前の道を直進数分だぞ。
しかも家からだと遠くだが見えるし。
桜花は何をやって迷ったか…非常に俺はそれが知りたい。教えてくれ、どうやったら直進で、建物見えてる場所に行く時に迷うかをさ。
霧雨、お前は俺のどこを認めたのだ？　はっきり言って二人ともちょっとずれてるぞ。
「まぁ、なんだ…中入るか」
俺はデパートの自動ドアを潜る。

デパートの中は空調が効いてるのかそうでないのか解らない室温だったが、不快になる程ではなかった。
俺は早速最上階へとエレベーターを使って上る。
「あれ、忍殿？　入用なのは食料品などではなかったのですか？」
桜花は戸惑いながらも俺について来る。

向かった先は衣料品売り場。
まずは安物の服を三、四着ほど買い物かごに入れる。
もちろん俺の着る服。
夏物をそろそろ準備しておかないと、すぐに夏になってしまい、暑さに負けて外に出ることが極端に少なくなるから、今のうちに早めに準備しておく。
「おい、コーサカ。お主服など買うのか！？　それならこっちの上着を買え♪」
霧雨は白いジャケットを指差して言った。
そのジャケットはポケットが少し大きめに作られてあり、生地自体が硬めにできていて、風　などではためかないような感じの服である。
「霧雨…まさかとは思うがこれ、お前が入るのに丁度いいからとかそんなのじゃないよな…」
俺は服をつかみながらそう言った。
それを聞いた霧雨は焦りながら否定をした。絶対図星だ。
「あー桜花、そういえばお前も何か買えよ。出かけるたびに俺の服使われては」
俺は財布の中身を確認しながらそう言った。
「え、手前もいいんですか！？」
桜花は表情を輝かせながらそう言った。
服の一枚や二枚でそんなに喜べるもんだなっと俺は桜花を見ながらそう思った。

その後、桜花はいくつも服を見ては俺に似合うかどうかを聞いてきた。
俺にそんなのを聞かれてもどう感想を言っていいのか解らないし、それなら同姓で一応女の霧雨に聞いたほうがいいと思うのだが。
霧雨は霧雨で明らかにご機嫌斜めだし。
そりゃ人形の服なんて売ってないからなぁ。

俺はこの二人と買い物に来たことを後悔した。
桜花に何かを買って、霧雨に何も買わないというのも気が引け、結局俺は白いジャケットも購入するのだった。
そして今はデパートの屋上でベンチに座ってアイスクリームを食べている。
今日だけで諭吉さんが大量に実家に帰ってしまったが、致し方ないことで、親父にその辺はどうにかしてもらおうと考えていた。
「こーら、コーサカ！　もう少し手を上げい！！」
買ったばかりのジャケットの胸ポケットに霧雨は入り、アイスクリームを俺に持たせるというなんとも贅沢なことをしている。
「霧雨、忍殿をそんなにこき使っては…」
桜花は俺を心配して、霧雨に注意を促す。
でも、霧雨がアイスクリームを自分で持つのはかなり無謀なことで、自分の身体以上あるものを持つのはきつそうだから、文句を言わずに持ってやる。
「ふふ、コーサカお前今すごく嬉しそう…というかなんとも言えぬ優しい顔つきになっているぞ♪」
霧雨はポケットから俺の顔を見上げてそう言った。
「そうですね、忍殿。なんかいいことでもあったのですか？」
桜花も霧雨と一緒になってそう言う。
「そう？　俺はいつもと変わらないと思うけど？」
そうは言ってみても、自分でもすごく懐かしく、胸の真ん中辺りがやさしく締め付けられるような感じはある。
親父とお袋で昔、こういうデパートの屋上でこうやってアイスクリームを食べた思い出が甦っている。
こんなこと思い出すことはなかったのだが、ここ最近。
というか二日前あたりから俺はこういう感情ばかりが思い出すようになっていた。
自分でもその原因は解っている。
桜花、霧雨とこうやって触れ合っていることで、何年も昔の感情

を思い出しているのだろう。
「ありがとな」
俺はそうつぶやくと、勢いよくベンチから立ち上がり、荷物を持って桜花と霧雨に『後は食料品買って帰ろうか』と言った。
霧雨は『今何を申した！？』と俺に問い詰めてきたが、そこはスルーし、建物の中へと入っていった。
まぁ、こういう休日も、たまにはいいか。

拙者は気になっている。

朝、俺が忍者または式神に起こされるようになって数日が経った。
俺が学校に言っている間は、家で一人と一枚が何をしているかは解らないが、まぁ、日々変わらずに流れてゆく。
「なぁ、コーサカ。お主毎日朝早く出て、夕方に帰ってくるが、何処に行ってるのだ？」
ちっこいコップの中に入ってるココアを飲みながら霧雨は俺に聞く。
霧雨は早くも我が家の酒用のコップを自分の物にしている。まぁ、身体の大きさ上しょうがないのだが。
「何処でも良いだろ。学生の本業を果たしてるのだから」
俺はトーストを齧りながらそう言った。
霧雨は『そうか』と言ってテーブルから降りた。
「忍殿、すいません…」
桜花は食事の手を止め、俺に謝る。
「何がすいませんなんだよ？」
いきなり謝られても、どう対応すればよいか解らず、桜花に聞き返す。
「霧雨のことです。大体『生紙の術』は媒体となる札を貰って一週間、自分の思うように教育をするのですが…」
育成ゲームのペットみたいだな。いや、確かにそんな感じはするよ。
「いや、良いんじゃない？桜花はあんな風に教育したんだろ？霧雨は解るとこは解ってって、結構気が利くから別にあのままで良いが…」
俺は霧雨に今の言葉を聞かれてないか周囲を見渡す。
霧雨はどうやら俺の部屋に行ったみたいで、恥ずかしい台詞を聞かれずに済んだ。

「いや、手前は一度も教育してないんですよ…」
桜花は落ち込んだ声でそう言い、俯いた。
おいおい、そりゃいくらなんでもないだろ。
俺だったら真っ先に教育して、俺ＬＯＶＥな……っていかんいかん、朝から暴走してしまいそうだ。
「で、何で教育しなかったの？」
俺はカフェオレをくいっと飲み、頬杖をついて桜花に聞いた。
「それは、術の元になる紙を貰った時、使用書に『そのままでも十分使えます』とかいてあったから…」
確かその術は術使用者をベースに式神を作るのだから、自分で出来ない事とかを教えて、自分の欠点を式神で補うものなんだろうな。
「まぁ、それはそれでいいんじゃないか？さっきも言ったように、霧雨は良い奴だしさ」
俺はそう言って時計を見る。
時刻はそろそろ家を出て、学校に行く時間だ。
「じゃ、そろそろ行くよ、留守を頼むな」
俺は自分の部屋に戻り、制服を着て、鞄を持って部屋を出ようとする。
「霧雨、じゃ行ってくるぞ」
霧雨にも声を掛けたが反応なし。
何処いったんだ、霧雨の奴。まぁ、その辺に居るだろ。
おっと、それよりも早く行かなくては！！

朝の登校時間、学校に近づくにつれて、俺と同じ格好をした奴が増えてきた。
「よっと…」
鞄を持ち直す。
なんか最近疲れているのだろうか…鞄を持ち直す回数が増えたような気もするのだが。
「おーす、高坂！！」

手提げ鞄を肩の辺りに掛けて歩いていた俺に、後ろから衝撃が走る。
「いってぇッ！！」
俺は後ろを振り向く。
其処には、俺の友人の井上公太郎（いのうえこうたろう）が笑っていた。
どうやらこいつが俺の背中を叩くか何かしたんだろうな。
「にしても違う悲鳴が聞こえたような気がするんだが」
公太郎は首をかしげながらそう言った。
「おいおい、未成年者の喫煙飲酒は法律で禁じられてるんだぞ。それに危ない薬を使用するのは速攻逮捕だぞ、ハム太郎」
俺はさっきの仕返しで公太郎の背中を叩く。
「だから公だけをカタカナで縦に読むな！！俺は『なのだ』な小動物か！！しかも俺は酒はのまねーし、あぶねぇ薬は決めてねぇ！！」
公太郎の怒涛のツッコミを聞いて清々しい気分になる俺。
俺と公太郎は教室へと向かった。
朝のＨＲ中、俺は鞄を開け、タオルとカンケースの筆箱を出そうとする。
「こ、こ、コー……」
俺はある『物体』にタオルをかぶせ鞄を閉じた。
な、何でこいつがぁ！？
「どうした、高坂？シャーペンでも忘れたか？」
隣の席の公太郎が俺に話しかける。
「いや、何でもねえよ」
俺は曖昧に返事をし、鞄を一瞥した。
ＨＲ終了後、俺は急いで鞄から物体を回収、トイレに掛けこんだ。
「こ、こ、コーサカぁ……拙者の考えが甘かった…鞄の中は怖い…恐ろしい」
えぐえぐと涙を流しながら俺はひたすら個室の水を流している。
「ああ、そうだな。で、何でお前が鞄の中に入ってたんだ？」
俺は涙を流している霧雨をつまみ上げて聞いた。

「いや、それは毎日お主が何をしているか気になってだな」
霧雨は霧雨で俺が結構怒ってるのを解ったらしく、申し訳なさそうに言う。
「今から帰れって言ってもお前帰れなさそうだしったく、大人しく鞄の中に入ってろよ」
それを聞いた霧雨は表情を変えた。
「後生だ、お願いだ！　鞄はもう嫌じゃ！　堪忍してくれ！！」
どうやら鞄にトラウマを新たに作ってしまった霧雨。
ここまで言われるとさすがに。
「わーった。じゃぁ制服の横ポケットに入ってろ」
俺は制服のポケットに霧雨を入れた。
都合のいいことに俺の席は出席番号順の並びなので窓際。
霧雨を窓際壁側のポケットに入れてりゃどうにかなるだろう。
「あと、絶対声を上げるなよ」
俺はそう言うと教室へと戻った。
霧雨は学校で授業を受けたことが無いらしく、見るものすべてが新鮮に映り、俺は暇な授業時間でも、霧雨は目を輝かせて見ていた。

そしてお昼。
俺は公太郎らの友人との昼食を断り、人気の無い場所で購買部で買ったパンを食べている。
「いやはや、学校というものは面白いものだな。そういえばコーサ、先の授業でわからないことがあったのだが。『異人語』の授業でコーサカが意味を聞かれただろう。そのコーサカの回答は間違っていて、正解を聞いたお主らの組の者たちが何故笑ったのかが。コーサカのほかにもハム太郎というものも間違っていたが、笑われなかったぞ？もしやコーサカ、お主…いじめられているのでは！？」
霧雨はちっこい刀を抜刀つつ、言った。
「落ち着け。俺はいじめられてねーよ。まずな『ｈｅｒｏｉｎｅ』って単語だったろ？　俺が問題出されたやつ」

俺は地面に木の棒で『ｈｅｒｏｉｎｅ』と書く。
「うむ、それでお主は『ヘロイン』と答えたのだったな。正解は『ヒロイン』だったが」
霧雨はう～んと悩みこむ。
「まずはヒロインの意味は女の主役って感じって言っていたっけな？　で、『ヘロイン』は危ない薬で、だ。俺の問題他にも単語がいっぱい書いてあったろ？」
俺は教師になったつもりで地面に次々に書いていく。
それを見て霧雨はうんうんと頷く。
「その前に書いてあった文をすべて日本語に直すと『彼女は今回の公演でヒロインをやっています』という内容になるのだが……俺の答えでは『彼女は今回の公演でヘロインをやっています』ということになってしまうんだ」
黙り込む霧雨。
「あはははっ！！ちょ…コーサカ…それはっ！！」
意味を理解した霧雨のツボに入ったらしく、霧雨はごろごろと転げまわって苦しんでいる。
「公演でやけになって薬使ってるのばれてるよ、彼女！！」
そういやなんでこいつヘロインが何なのか知っているんだろう？
まぁ、家にいるとき午前中から正午までの時間教育番組見てたんだろうな。その知識としておこう。
『ブーン…ブーン…』
ポケットに入れていた携帯のバイブレーションが動く。
俺は携帯を開いて見ると、桜花からのメールで、霧雨がいないことを心配して俺にも報告してきたのだった。
俺は『遊びに行ってるんじゃねーの？俺が帰ってくるまで帰ってこなかったら対策を考えよう』とメールを打って返信した。
桜花は心配でたまらないだろうが、俺は……実際に目の前で窒息死しそうになってる姿を見てるからなぁ。
午後の眠い授業も何とかこなし、桜花に『食材を買って帰る』と

メールをし、スーパーでお買い物。
それが終わるころにはすっかり日も沈みかけ、夕暮れになっていた。
「あー今日は楽しかったぞ、コーサカ♪　これならばまた機会があれば行きたいものだ♪」
霧雨は制服の胸ポケットに入って上機嫌で言っている。
それを俺はちょっと見る。
その視線に気がついたのか、霧雨は『冗談だぞ…』と言っている。
「毎日はたまらねーが、たまにならいいぞ。そのときは俺に絶対に言うこと」
霧雨は驚いたように目を見開いて…『いいのか！？』と何度も俺に聞いてきた。
「ああ、たまにだぞ、たまに。あと桜花が心配してるから適当に出かけると言っておけ」
そういって家への帰路を急ぐ。
そして家の前…玄関先にて。
「霧雨、お前は今日そこの公園で遊んでた。学校には行ってない、おーけ？今日のことは桜花にゃ言うなよ。小言が飛んできそうだからよ」
俺は霧雨に笑いかけた。
「承知！」
霧雨も満面の笑みで頷いた。

拙者は気になっている。（後書き）

どうも、水無月五日です。
前回の、あとがき忘れちゃいました。
何とか微妙に進んでいるこの話。
ちょっともうしばらくは全体的に小説書くスピード、私情により遅れそうですが、なんとかがんばります！！
今回も読んでいただき感謝感激です！！

俺の家で吸うな。

俺は家に帰るなり、居間で教育番組で、やたらと手が込んである十五分間のドミノ倒し番組を食い入るように見ている、一人と一枚の手を取り、自室の押入れと入れ込む。
「ちょ、何をするんですか、忍殿！！」
「あ、馬鹿コーサカ！！今一番手が込んでありそうなドミノだったのに！！」
俺は各々からの質問、文句を浴びながらも着実に事を進める。
そして桜花の寝床である押入れの襖に手を掛けた。
「いいか、急に客が来た。ここでそいつにお前等の存在を知られると、非常にやばい」
主に俺の体面がだが。
「そういうわけで、そいつが帰るまで此処で待機。なお、拒否権はない」
俺はそう言い終わると、襖を力いっぱい閉め、閉めたほうと逆側に用心棒の変わりになるものを差込、折りたたみのベットを上げる。
「よし、コレでオッケー」
俺は折りたたんだベッドで襖が見えないようにした。
そして、玄関先で俺の合図を今か今かと待ちわびている客人を部屋に招く。
「おそい、高坂。別に俺は女じゃねーから部屋にいかがわしい本の一冊や二冊や何らかの紙が落ちていても気にしないって」
客人はそういって声を上げて笑った。
「俺としてはそういうのは見たくないけどなぁ…公太郎」
そういって俺は客人の名前を呼ぶ。
事の発端は今から一時間ほど前である。
「おーい、高坂〜」

帰り支度をしていると公太郎がにこやかに手を振ってこちらへと駆けて来た。
「どうしたんだよ、公太郎。やけにご機嫌じゃないか？　悪いもんでも昼に食べたか？」
俺は手提げバッグのチャックを閉め、公太郎と向き合った。
「悪いもん食うったって、お前と俺は今日は一緒の『きつねうどん』を食べただろ。俺がおかしくなるならお前も、さぁ一緒に！？」
公太郎はその場でターンしながら頭を下げ『しゃるうぃ、だぁんす？』と聞いてきた。
「断る。しかもきもいわハム太郎！！」
俺は手の甲で軽く公太郎のでこを弾く。
「おお、ナイスツッコミ。ボケるお前もついにはツッコミを覚えたかぁ…」
このままでは、地球の寿命が来るまで話が進みそうにないので話を切り出す。
「で、何か用？　ないなら俺帰るよ？」
俺はくるりと方向を変え、家へ帰ろうとする。
公太郎は『まってくれよ～』と、よく映画とかで居そうなお調子者の真似をして俺の後を付いて来る。
結局は公太郎と二人並んで帰路を進む。
そしていつも公太郎が曲がる地点で公太郎は曲がらず、俺と他愛もない話をしながら歩く。
俺は公太郎に曲がらないわけを聞こうと思ったが、多分店か何かに用事があるんだろうと一人で納得。
俺の家が見え、俺は真っ直ぐに家の…アパートないの敷居を踏む。エレベーターに乗り、自分の家の階へと進む。
「そろそろ言っても良いよね？」
俺はくるりと振り返る。
「お前何処まで付いてくる気だよ！？　ストーカーか、お前？」
公太郎は『いっけね、ばれちゃった♪』と舌を出してウインクす

るという、妙に古臭く、芝居のかかった動きをする。
「いや、結構前に話したろ？　俺んち唯一のＤＶＤ再生機器の『黒い箱』のＤＶＤ機能が変だって」
確かに数日前聞いた。
ゲームは出来るけど、ＤＶＤが見れないっていう、変な状態だったな…
幸い、俺んちの『黒い箱』は今のところ元気に動いてくれるが。
「でな、俺隣のクラスの奴らからＤＶＤ借りたんだよ～でも、俺んちじゃ見れないからお願い、高坂！このままじゃ生殺しだよ！　気になって夜も眠れない！」
まぁ、此処まで付いてきた事だし、何の映画か気になるからな。
「ああ、良いよ」
そう口にした瞬間、思い出した。
俺の家の中は、ほんの数日前とは現状が全く違う事を。
さっきの許可を取り消そうと、公太郎へと視線を向ける……
其処には『やった、やった♪』と上機嫌で踊っている公太郎の姿が。俺は、そんな彼に『やっぱ駄目だ』と断れるほどの勇気と行動力は持ち合わせていない。
そんな俺だから、コンビニで買い物をしたときに、レジのおねーちゃんから『肉まんもどうですか？』と笑顔で聞かれたときに、食べたくもないのに『あ、そうだね、お願いします』と言ってしまうのだろうか？
そういうことは玄関先に置いておいて。
俺は公太郎に『ちょっと待ってろ』と言って家へと突入。桜花の靴を隠し、居間へと一直線。
これが今までの経緯だ。話は元に戻って……
公太郎を居間へと招き入れる。
「早速だけど、高坂、『黒い箱』お願いね」
公太郎は制服の上着を脱ぎながらそう言った。
俺は『了解』と制服のボタンを外しながら答え、俺は六畳半の自

室へと向かった。自室で、ジャージに着替え、居間のテレビに『黒い箱』を接続する。
俺は公太郎に何か飲み物を出すために、キッチンへと向かった。俺が自分の分の飲み物と公太郎の分の飲み物、適当なお菓子を持って居間へと戻った時には、公太郎はＤＶＤをセットし、再生ボタンを押してるところだった。
テレビの画面には大きく『活動絵巻、戦国編』と大きくタイトルが表示されていた。
俺はこんな映画あったかなぁと不思議に思いながらも、公太郎の横へと座った。
始まって五分ぐらい経った頃、やたらといやらしい格好のくのいちのおねーちゃんと、これまた露出の高い侍女のおねーちゃんが戦っている。
「公太郎？　この戦闘の始まり方妙に変だぞ…」
そしてその瞬間、俺は凍りついた。
画面の中の色は肌色。
つまり、アレだ。
コレは俺が予想していた血湧き肉踊る派手な戦闘ものの映画でもなく、うっすらと目尻に涙の浮かぶ感動ものの映画でもない。
「公太郎、コレってえーぶ…」
俺は口を開くが、ついつい画面に見とれてしまう。
結局、俺と公太郎は二時間もの間、この映画を見てしまった。『続く』と表示が出る頃には日も落ち、辺りは暗くなっていた。
「いやぁ、しかし、面白かったなぁ公太郎…馬鹿馬鹿しくて」
「そうだよなぁ…実際にあんな風に一つ屋根の下で女の子と暮らして見たいよなぁ…勿論今の時代で…」
俺と公太郎は映画の感想を語り合っていた。
「確かに。ラヴコメの生活ってやつは一度は体験してみたいよなぁ」
「じゃぁ、とっちが先にその生活を手に入れるか賭けようぜ！！
負けた奴はペットボトル２リットル奢りな、高坂！！」

公太郎とありえない賭けを始める。
まぁ、こういうのは非現実だからこそ良いのであって、実際にはあるわけがない。
「高坂ぁ。お腹すいたー、何か作って～」
公太郎は高校生にふさわしくないスティックを堪能している。
「俺の家で吸うな！　臭いがうつるだろう。それにこんな時間まで俺の家に居て良いのか？　お前は主人各の小学生か中学生かの女の子の一日の感想を聞いてだなっ…うわっぷ！！」
俺の顔に煙が吹きかけられる。
「だから公だけをカタカナで縦に読むなって」
そういって公太郎は『にししし…』と笑う。
「償いとして食い物を作ること」
そういって公太郎はチャンネルを変え、バラエティ番組を見る。
俺は公太郎の笑い声を聞きながら、残り物のの白飯で焼き飯を作る。
飯も食い終わり、ほのぼのとした雰囲気でテレビを見ている俺と公太郎。
見ていたドラマも終わり、公太郎は時計を見て『そろそろ帰るわ』と言って、制服をまた着だした。
そして俺は公太郎を玄関先まで見送って、皿を洗い始めた。
「ったく、霧雨のコップは洗いずらい…」
そう独り言を言って何かを思い出した。
「そういえば！」
俺は完全に思い出した！　押入れの件を。俺は急いで六畳半の自室へと向かい、押入れをあけてやる。
中には……死にそうな顔色をした桜花と霧雨が居た。
「し、忍殿ぉ～」
某井戸女の如く押入れから這い出してくる桜花。ぶっちゃけかなり怖い。
「コーサカ……殺す気か！！」

某チェーンソー男のような雰囲気を漂わせて押入れから出てくる霧雨。ぶっちゃけ怖くない。
「いや、悪かったって、な？」
俺は一歩下がり、両手を前に突き出して一人と一枚をなだめる。
だが、それだけでは怒りは収まらないようで俺は押し倒されてくすぐられている。
「おまっ…ちょッ…やめッ！！」
その時、玄関の戸が開いた。
「わっりぃ、高坂、ライターわすれっ……」
くすぐられている俺と、公太郎の目が合う。
き、気まずい！！
公太郎、コレは違うんだ、コレは！
声にならない声で俺は震えている公太郎に声を掛けようとする。
「高坂…何、これ？」
信じられないと言った顔で公太郎は俺に答えを求める。
俺は公太郎を再び居間へと招き入れる。

「公太郎、コレはある事情があってな…」
俺は正座をして霧雨を指差す。
「見たとおり、ありえない大きさだろ？　この子。実はこの子奇病でな、何十万人に一人発病するかしないかの病気で、身体が凄くちっさくなってしまう病気なんだ」
勿論嘘である。
本当のこと言っても信じないだろうし、俺がそう言われても信じる事はできない。
だから、嘘八百で突き通すしかない。
桜花、霧雨には目で合図をし、話を合わせろ、と言う雰囲気を出しておく。
「で、元々別の県に住んでた俺の従姉妹でさ、この、霧雨の病気が外国のメディアにばれたらしいんだ。それで連日、こいつらの家に

は、特ダネをゲットしようと各国の記者が集まってだな……こいつらの親…つまり、俺の叔母さんがストレスで倒れちゃってね。で、記者を撒くために一人暮らしの俺んちで暮らすことになったんだ。でな、お前にも黙っていたのは、少しでもこういう情報を他人に漏らすと……」

俺はそこで言葉を途切れさせ、公太郎の様子を窺う。

我ながらよく此処まで良いわけを思い浮かべれるなぁ。

「高坂！　ひどい話しだよなぁ」

公太郎は腕を組み、うんうんと頷いている。

よかった、信じた！！

「でもな、その格好おかしいだろ。さっき見たくのいちの格好や巫女さんの格好は」

鋭い公太郎のツッコミ。

俺は答えに困り、言葉のキレがなくなる。そんな俺の様子を不審に思った公太郎が口を開く。

「何か隠してるな…高坂？」

俺と公太郎は昔からの仲で、お互いの癖などが良くわかるほどだ。俺の頬、背中に冷たい汗が流れる。

「公太郎殿、手前たちの実家は神社で、しかもかなり昔からの考えが続いてる家でして。手前たち姉妹のうち、家の血がこゆい方が巫女になり、もう一人のほうが黒子のようなことをするのがしきたりでして、手前より妹の霧雨のほうが血がこゆく……」

桜花が俺へ助け舟を出す。

「えっとな…覚えてるか、公太郎、お前昔『寺とかそういうところに住んでる奴って俺ちょっと付き合いにくいなぁ…』って言ってたろ？」

これまた嘘である。

「それでな、家は寺とかじゃないんだけど、従姉妹にそういうのが居た俺としては、真実を打ち明けるのが怖くてな…」

唇を噛みながら俺は公太郎を見る。

「そ、そんなこと言ったのか、俺……いや、言ったような…気も…」
俺は言葉巧みに公太郎の頭を混乱させる。そして、公太郎は口を開いた。
「高坂、今日見たことはしゃべらねぇよ。俺の胸の中でしまっておくよ」
そう言って公太郎は笑った。
良いやつだなぁ。
多分、コレが偽り無しの出来事だったら多分俺、泣いてたな。
「じゃぁ、俺帰るな」
ちょっと落ち込んだ様子で席を立つ公太郎。
それもそうだろう、何せ友人の隠していた一面を知ったのだから。
家に見知らぬ同居人が居て、これからも気軽にそいつの家を尋ねれるわけがない。
俺だってそうだと思う。
知人の家に自分の知らない同居人が居れば、気まずく、今までのように急に押しかけたりとかも出来なくなる。
公太郎はそんなことを考えているのだろうか？
俺は声を掛けられずに公太郎の背中を見送る。
「おい、ハム太郎！　また何時でも遊びに来い！　拙者達の知らないコーサカのことを教えてくれ！！」
霧雨がテーブルの上で手を振っている。
公太郎はそんな霧雨を見て。
「俺はコータロー、そこんとこオッケー？　霧雨ちゃん」
霧雨に親指を立てて、公太郎は答えた。
「公太郎、またいつもの通りに家に来てくれよ。こいつらなんて俺の妹ぐらいな感じで見て良いからさ。今度、皆で何か飯でも食いに行こうか？」
俺は公太郎に笑いかけてそう言った。

俺の家で吸うな。（後書き）

こんばんわ、水無月五日です。
がんばって、この話も盛り上げていこうと思います。
いろいろとネタのあるこっちのほうが進めやすいのが今の現状。
これからもがんばっていきます故、よろしくお願いいたします。

これは忍術の道具です。

暇な休日の昼下がり。
今日は来客の予定もなく、ただごろんとして休日を過ごす事に決めた。
そう決めていた矢先、玄関のチャイムが鳴り、俺は誰だろうと？
覗き穴から訪ねてきた人を確認する。
白と青の縞の帽子…あぁ、宅配便か。
そう思って俺は判子を持って玄関のドアを開ける。
「こんにちわージャパン安全運送です」
そういってお兄さんはぺこりと会釈する。
俺は荷物の受け取り印を押して、その荷物を居間に運ぶ。
荷物は桜花宛て。
「桜花ーなんか荷物届いたぞ」
そういって桜花を居間へと呼び寄せる。
「ん、これは食べ物か？」
おまけの霧雨も着いて来た。
「そうだといいな」
俺は荷物を桜花に渡す。
「あ、これ私宛の新しい忍法用の道具です」
へぇ…何の術なんだろう？
覗き込んで見たものの、やはり解らない。
「何の忍法なんだ？」
「ん～今からやってみますよ」
そうだな、百聞は一見に如かずだしな。
「何の術なのだろうな？」
よじよじと俺というでかい山に挑戦する霧雨を摘まんで肩まで一気に移動させる。
なんというか…もう此処に霧雨が乗ってることは気にならなくな

ったな。
「では、行きます！　臨・兵・闘・者・皆・陣……」
そう言っていつかの九字を切り出した。
見るのは二度目だが、九字ってカッコ良いなぁ。
「裂・在・ぜっ…くしゅん！！」
決まった。って決まってねぇ！！
途中でくしゃみするなぁ。
くしゃみの反動で桜花の指から紙が滑り落ちる。
ひらりひらりと床に落ちる紙。床に落ちた瞬間、ぼわんと煙が辺りを包み込む。
「ッ！！げほ、けほっ！！」
俺はその煙を吸い、思わずむせる。桜花も霧雨も同様だ。
「こ、今回のはやたらと……」
煙が薄れ、その煙の中心には……桜花が居た。そして、その隣にももう一人桜花が居た。
「桜花様が二人！？」
霧雨は俺の肩の上で驚いてる。
「ぶ、分身の術か？」
そう言って俺は桜花の分身に触ろうとしたら……
「シュッ」
そう言って俺の手をかわし、すれ違いざま、俺の腰の辺りを手で押して、一目散に外に出て行く。
「だぁっ！！」
いきなり押された事で、俺は前面につんのめり常態になる。
「だ、大丈夫ですか忍殿！！」
桜花が俺を立ち上がらせながら言う。
「あぁ、大丈夫だが、外に出たぞ、アレ」
俺的にはもうほおって置きたいところだが、事態が事態なのでほおって置けないのがこの現状。
俺はジャケットを上に羽織り、急いで外に出た。

「桜花ッ！外に出られたのはまずい…何処にいるかわかりやしないよ！！」
「手分けして探しましょう、忍殿！！」
そう言って俺達は闇雲に駆け出した。

俺は一人で思案を巡らせている。
「どうする？考えろ…何処に居そうだ？」
よく考えろ、分身の術のベースは桜花だ。
桜花といえば…方向音痴？　くそ、余計にたちわるいじゃないか。
俺は観念し、一度この街の地図を確認するべく、家へと向かった。
「人が……居るのか？」
家に入るなり、俺は物音が聞こえた。
そぉっと物音のした部屋を見てみると……
居たよ、おい。分身桜花が。
帰巣本能なのか？
それとも俺達をかく乱させる作戦だったのか。
桜花、霧雨を呼んで捕まえよう。
俺は桜花、霧雨と合流。ひっそりと包囲網を作り、中に居る分身の桜花を捕まえるべく、俺達は作戦を開始した。
まず俺が玄関に待機。霧雨、桜花が指定の場所に待機、合図と同時に一気にかかる。
何とかして一画に追い詰められれば。
「行くぞ！！」
そう言うと俺達は一斉に油断しきっていた分身の桜花に飛び掛った。
「くッ！！」
分身の桜花は油断していたのか、簡単に俺達で囲む事が出来た。
「よし、もう逃げられないだろ」
じりじりと俺達は距離を詰める。
「ど、どうしてお前達わかったのか？」

距離を詰められてあせあせと言う。
「いや、勘だ…というか偶然？」
俺はそういうと、分身の桜花はがくりとうなだれる。が、一瞬の隙をついて、桜花を掴んでグルグル回った。
「な、桜花様に何をする！！」
「うわ、まわる！！」
回り終わった桜花二体は横に並んでる。
「おぉ、どっちが桜花様かわからないぞ！！」
霧雨はおろおろと二人を見比べている。
「手前ですよ、忍殿、霧雨！！」
「手前ですよ、忍殿、霧雨！！」
よくあるパターンだ。
「偽者はこっちです！！」
「偽者はこっちです！！」
二人して指差す。
「こ、コーサカ…どっちが…？」
いや、俺人目でどっちが偽者か解ってるんだが。
この術、桜花の失敗で分身を作り出したのだが、顔、服装、身長は同じ…決定的に違うところがある。
「お前が分身だ」
そう言って俺は二人並んだうちの分身の桜花の腕を掴む。
「そんなことないです、忍殿、よく見てください！！」
分身の桜花はバタバタと手を振り、言い訳を始める。
「それは残念だが、俺には全てのネタは解ってるんだよ、悲しい事に」
「こ、コーサカ、ほ、本当にそれが桜花様なのか？」
実にフガイのない式神だ。
「なぁ、霧雨。お前本当にわからない？」
俺は霧雨の首根っこを掴んで二人を見比べさせる。
首根っこを捕まれた霧雨は『ひゃん』と微妙な声を出しながらも

二人を見比べる。
「お……おぉ！！」
霧雨もこのトリックに気がついたようで、本物の桜花を指して『こっちが桜花様だ！』と名探偵の如く声高らかに宣言した。
「ふふ、拙者にはわかったぞ、確かに偽者は桜花様そっくり……でも桜花様に仕える拙者には通用せん！！」
確かに言っていることは格好いいが、言うのが遅すぎ。
今、不等号で桜花のことを理解しているのを比べると……
俺＞＞＞霧雨
とかなり差が出てしまったな。
さて、種明かしとでもいこうか。
まず根本的なところから。
分身の術てのは俺は忍者じゃないから解らないけど、まぁ兎に角自分が二人も三人も居るように思わせるのが目的だと思う。
それを踏まえた上で、二人をよく見てみよう。
顔は瓜二つ。
これで双子ですと言われれば信じてしまうほど瓜二つである。
で、次にその術を使うシチュエーションを考えてみよう。
街中でいきなり分身を出しても、一体何をするのか、できるのかすら想像つかない。
一般的な論理からいくと、分身とは自分の姿を増やして、対峙する相手をかく乱させたり、　分身を囮にして自分は身を隠す時に使うだろう。
仮に対峙したときに明らかに、一部分だけ違ったらどうなる？
「えっと、分身の桜花、お前はほんとよく出来ている…でもな、中途半端な術の失敗のために、お前の一部分は……」
そう言って、俺は分身の桜花の胸を指す。
「あ……」
固まる分身。
そりゃそうだろうな。

「それにしてもコーサカ…お主も好き者よのう……」
くっくっくと、袖で口元を隠しながら俺を小突く霧雨。そして俺の肩からずり落ちそうになる。
分身の桜花は観念したのか、その場にへたりと座り込んだ。
「し、忍殿……こ、この分身の処遇は……」
桜花はおろおろと、俺の判断を待つ。
「秋桜、お前はどうしたい？」
そう言って俺は分身の桜花に手を差し伸べる。
「ど、どういうつもり？」
分身の桜花は俺の言葉が正しく理解できなったのか、腰を上げ、一歩後ずさった。
「だから、秋桜はどうしたいと聞いてるんだよ」
桜花と霧雨は押し黙ったまま、事の流れを見守っている。
「き、決まってるだろう、できるものならこの姿のまま過ごしたいに！　折角外で動けるカタチを得たんだ、それをみすみす手放したくはない！」
力強く、自分の意思を吐き出す分身の桜花。
「じゃぁそれでいいじゃないか…俺はそれが秋桜の意志ならば、それを受け止めるよ」
そう言った瞬間、桜花が声を上げた。
「し、忍殿、いいのですか！？」
「あぁ、こうなったのも親父が桜花を此処に来るように言ったのが始まりさ、自分がまいた種だ、それぐらいは許してもらうよ。それに、こうまで似てるんじゃ桜花、多少は情ってもんが湧くだろ？」
そんなこんなで我が家にもう一人、居候が増えた。
「某は貴方を主とし、忠誠を誓います」
分身の桜花…いや秋桜はいつか見た、あの忍者ポーズでそう言った。
「ま、そう硬くならずに、自分のやりたいようにやりなよ」
公太郎への言い訳を考えるのがまた面倒になったぞ、これは。ま、

でもこうなったのも何かのサダメ。
　そんなことを考えていた俺だが、この時点で俺の知らないところである計画が動き出していた。

ワタシハエミリー。

「おーい、高坂、聞いたか？」
「え、何が？　公太郎」
朝、教室に入るなり、俺より早く学校に来ていた公太郎はこちらに駆け寄ってきた。
自分の机にかばんをかけ、椅子に座ると公太郎の話を聞く体制に入る。
「留学生がこのクラスに来るんだってよ！！」
「へぇーで、そんな留学生が来るなんて話初めて聞いたなぁ。というか初めてなんじゃないのか？」
「うんうん、名門中の名門って学校でもないし、何か伝統ある学校でもないただの普通校にねぇ……」
うーんと二人で悩む。
「おい、コーサカにハム太郎、朝からどーした！？　そんな顔して！」
朝から高いテンションである男が近寄ってくる。
髪はいかにも染めたの隠してますて色してる黒髪と、耳に透明のピンが刺さってる。
「お、馬場、はよーさん」
「誰れがなのだ生物じゃ！！　というか古いよ、もう！！」
そういうなってっと馬場は笑い、俺の横の席に腰掛ける。
「で、留学生がこのクラスに来るって話だけどよ、男と女どっちだと思う？」
「やっぱり女だろ？　というか女がいい。みんなで賭けるか！？一口ジュース一本！」
馬場と公太郎はノリノリで賭ける準備を始める。
女が良いと言っていた二人だが、物事に金が絡むと現実を取るらしく、二人とも仲良く留学生は男と言っていた。

「なぁ、二人とも男にかけてるみたいだけど、それじゃ賭けにならないんじゃないか？」
俺が口を挟むと、二人はニヤリと口元を緩めた。
「そりゃーもちろん、コーサカ、お前は女に賭けるよなぁ」
「そうじゃねーと賭けにならないからなぁ」
馬場と公太郎は二人で俺を陥れる気だ。サイッテー。
「あぁ、もう、好きにしろよ！」
半ばやけになって机に二百四十円投げ落とす。
「よしきた」
「オッケーオッケー」
そんな俺達の頭にパコっと教科書が降ってきた。
「なに、あんた達朝からショーもない賭け事してんの？」
『ウゲ、ツンデレ委員長！』
三人そろって身を引いてみる。
「いや、その言い方嫌いだからやめて！」
「うぉ、ツン来た！ツン来た！」
馬場がはしゃぐ。そんな馬場に容赦なく教科書の角が襲う。
「うぉッ」
馬場が短い悲鳴をあげてうずくまる。
「ちょ、オーバーなのよ！　そんなに強くしてないじゃない！」
「うぉ、デレ来た！　デレ来た！」
公太郎がはしゃぐ。　そんな公太郎に容赦なく教科書の角が襲う。
「いてぇッ！」
公太郎が短い悲鳴をあげてうずくまる。
「あんた達ねぇ…人の行動を何でもツンデレとか…嫌がってるのをツンデレとか言われたらたまったもんじゃないわよ！」
「嫌も嫌よも好きのうち」
ぼそりとつぶやいた俺に容赦なく教科書の角が襲う。
「ギャァッ！！」
そんなことをしてるうちに朝のＨＲの時間になった。

ドクリ、ドクリと心臓の鼓動が聞こえる。多分、馬場も公太郎も同じ心境だろう。
ガラリと教室の扉が開く。
眼鏡をかけた、いかにも教師っぽい面の我が担任様が入ってくる。
「あーみんな多分知ってると思うが、今日は留学生が飛び入りで入ってくることになった。さ、自己紹介を」
ゴクリと喉を鳴らす。
男か…女か……
その留学生の姿を見て、一目瞭然だった。
ビバ、ビックサイズの国！　あの髪の色はまさしくビックサイズの国だ！
「ミナサン、コンバンワ！　オー、ワタシエミリー！アメリカから来たデス！」
おぉう！　いい感じの片言だ！　今は朝ですよエミリーさん。
まぁ良いか。俺は勝ったんだし、あの二人に。
俺の視線の先には悔しそうだが、心底嬉しそうにエミリーを見る二人が居た。
「早速だが、自己紹介を始めてくれ」
順番に自己紹介を始める。エミリーは一人一人にオーバーにリアクションを取っている。
流石ビックサイズの国！　リアクションすらビックだ。
「井上公太郎、アルバイト大好き！」
元気よく公太郎はエミリーに自己紹介している。
「おー、イノウエ！？　そっちのイノウエも、イノウエデース！！ブラザーデスカー？」
「いやいや、別人、えっと、ノットファミリー？」
「なら、そっちのイノウエはイノウエデ、コタローはコタローでオッケーデスカ！？」
そんなやり取りに周囲から『ハム太郎で良いぞー』と野次が飛ぶ。
エミリーはワカリマシタ！　と元気に返事をしていた。

ついに、俺の紹介の番が来た。
「高坂　忍、えっと、趣味は……」
「オ、オォッ！！　コ、コーサカシノビ！！　ニンジャデスネ！」
「うぉ、しのび違ぇ！　し・の・ぶ！」
「おーシノビね！」
クラス中から湧き上がる笑い声。いや、漢字は一緒なんだけど……そうなんだけどッ！

何とか自己紹介を終えて、俺は公太郎、馬場からお金を巻き上げていた。
「クソ、負けた！　が、後悔はしていないさ」
「そうだよな！」
二人は机にカランと百二十円を置く。
「あんた達……」
『うぉ、委員長！』
「ところで、高坂君は二口ぶん出していたわけだから、一人二百四十円じゃないの？」
「クソ、ばれた！」
二人ともさらに百二十円出す。うぉ、俺一人の大勝！！
そんな俺達のところにエミリーが来る。
「オーシノビニ、ハムタロー、ババ！　何してるのデスカ？」
「あ、エミリーちゃん」
俺達三人と委員長の視線はエミリーに向けられる。
「憧れニッポン、ベリーエキサイティング！　アニメ、ジダイゲキ、ハラキリ、ゲイシャ！　イロイロミタイデス！」
「あぁ、それならテレビ見てればすぐ見れるよ」
とりあえずハラキリは無理だがな。
「あとは、メイド、オタク、アキバ見たいデスネ！」
「まぁ、それは…行くとこ行かなきゃ見れないなぁ……」
日本の文化ってやっぱりかなり有名なんだなぁ。

「まー、ソレハイイトシテ、エミリーと、フレンドニナッテクダサイ！」
それはいいとしてって、結構凄い日本語しってんなぁ。
「友達なら大歓迎だよ！」
俺達はエミリーと握手をする。これもやっぱりビックサイズの国の文化か。
「オー！　サンキューベリーマッチ！　ニンジャノフレンド、ニッポンで出来マシタ！　流石サムライノ国デース！」
「いや、もうサムライ日本には居ないから……」
そんなこんなで、これまたすごい知り合いが増えてしまったわけだが、霧雨は置いておくとして、桜花と秋桜にあったらエミリーはどうなるんだろう……？
倒れたりとかしないよな！？

ワタシハエミリー。（後書き）

何とか続きが書けたわけですが……一体どーなるんだろ、この話。いや、話の展開というよりジャンルが。コメディーになってるんですけど、此処まで女の子増えたらラブコメ……まぁ、とにかくがんばっていきますよ！

重要な密書が

いつものように、学校での一日を終えて、家に帰ろうと馬場と公太郎と一緒に教室を出ようとしたところ、俺達はエミリーに呼びかけられた。

「オー、シノビー今帰リデスー？」

結構オーバーに手を振って、コチラへと近づいてくる。俺の横で若干二名ほど、はう、ほう、などといったうめき声を発しているものも居るが。

「うん、今帰りだけど何か用事有る？」

「ハイ、チョーット行って見たい場所があるケド、一人じゃ心細いネー」

「へぇ、一人で行きにくい場所ってこの近くにあったかなぁ？」

この近くで一人で行きにくい場所といえば、移動販売クレープ屋ぐらいか。それにクレープ屋も男である俺が行きにくいだけで、エミリーは関係ないだろう。

「しし、忍殿ぉぉぉぉ！！」

い、今幻聴が聞こえたのか！？　桜花の声がしたような気がするけど……

「なぁハム太郎、コーサカ今、コーサカを呼ぶ声がしなかったか？」

馬場が周りをきょろきょろしながら言う。

「しし、忍殿ぉぉぉぉ！！」

「ほら、やっぱり聞こえる！」

ヤバイ、何で桜花がこの時間学校に来るんだ！？　まさか、緊急事態！？

「はぁ、はぁ、忍殿…重要な密書が此処に……」

教室に残っている皆の視線が窓の外に集まる。

俺もそれに習って俺の背後の窓を恐る恐る見ると……

「ぶっ！！」

窓を開けて、上半身を覗かせている桜花が其処に居た。ちなみに言うと、此処は二階。
「忍殿、ほら、みてく……」
素早く窓にぶら下がっている桜花の腹の辺りを両手で捕まえ一気に引き起こし、仰向けの状態で肩に担ぎ、一旦片手を外し鞄を持つ。
「皆、見るな、これは七不思議の一つぶら下がりお化けだ！！　まともに見たら呪われるぞ！？」
某きのこ男のレースゲームで黄金きのこが出たときの如く、全力ダッシュで俺は教室を後にする。ボタン連打だ、ひぁうぃ、ごー！！
「しし、忍殿ーーー何するんですか！？」
「うるせーーーお前には常識が無いのか、この馬鹿ーーー！！」
なんとか、人ごみを避けて公園まで走って、そこで桜花を下ろす。
「で、どうしたのよ…その緊急事態は？」
「は、はい、実はこれを！」
そう言うと桜花は携帯を開き、メールを見せる。
「何々…合格おめでとう、第三段階目の修行に移ります…詳細は……」
デコメールで装飾されたメールである。突っ込むべき所が多すぎて何に突っ込んでいいかわからない。
「と、とりあえず、おめでとう、桜花」
「はい、ありがとうございます、忍殿！　手前のような半人前が合格できたのも全ては忍殿のご指導、ご鞭撻のおかげです！」
ぎゅっと俺にくっついてくる桜花。喜ぶ桜花を見ながら、俺は先ほどのメールの事が気になって仕方がなかった。
「も、もう一度褒めて欲しいです…忍殿」
「あ、あぁ、何度でもお祝いしてやるよ、おめでとう」
そう言うと、桜花の手から無数の花弁が空に踊る。
「忍法、花吹雪……」
舞い踊る花弁を見つめながら俺は娘が志望校に合格した父親の気持ちってこんなのかな…なんて事を考えていた。

その時だった……
「お、オォウ！　シノビはやはり忍者だったのデスネー！」
焦りながら振り向くと公園の入り口で両手を組んで喜んでいるエミリーが居た。
「え、エミリー！？　こ、これは……」
言い訳を考えていた俺にエミリーは笑いかけ、全てわかってますよという表情で口を開いた。
「ニンジャハ正体ヲバラセマセーン、シノビガニンジャトイウコトハ二人ノ秘密デース！」
喜々としてそう言うエミリーに一抹の不安を覚えた俺だったが、とりあえず桜花の事が大々的にばれなくてよかった。
「其処ノニンジャガールノ名前ハナンデスカ？」
桜花に詰め寄るエミリー。心なしか鼻息が荒く感じられる。桜花は桜花で未知との遭遇にかなりビビっている様子。
「て、手前は桜花です！」
しゃがみ、片手を腰に、もう片手を膝の前につく。いつもの忍者スタイルで自己紹介をする。
「私ハエミリーデス、ミスオーカ！！」
そんなこんなで日米代表の初顔合わせだった……。
「こら、コーサカ！！　何を勝手に終わらせようとしている！！」
べしっと脳内で綺麗に話をまとめていたのを、脳内霧雨がその考えを蹴り飛ばす。くそ、脳内でも猪口才奴……ッ！！
「で、エミリー、そういえば学校で言っていた行って見たい場所ってどこよ？」
桜花の登場で中途半端になっていた質問をエミリーに問いかける。数秒後、何の事柄か思い出したエミリーはオーバーなアクションで、
「オー、ツンデレ委員長から七不思議ノ話、聞いたデス、それで、確かめに行きたいデスケド、一人じゃ怖いネー！」
エミリーからの認識もツンデレ委員長になってる委員長が少し不憫に思え、そしてまだ明るいうちに七不思議を見に行く、と言うち

ょっと間違った認識のエミリーを見て俺は吹き出した。
「あはは、エミリー暗くないのに七不思議調べに行くの？」
「ハイ、だって夜中に行って本当にゴースト出たらびっくりネ！
ゴースト出ない時間に調べるネー！」
　む、そういう考えもあるか。気になるけど実際に見たくは無い。
それだったら夕方とかに怪しい場所見て回ろうと。うーん、文化の
違いって考え方も変わるのか。
「あー納得。じゃ、明日当たり、馬場やハム太郎も誘う？」
「おー流石シノビ！！　善は急げ、急がば回れデスネー！！」
　うん、日本人でも最近はたまにしか使わないことわざを使うとは、
流石。しかし素晴らしく矛盾しているぞ。
「じゃぁ明日にでもやるか？」
「オーケー、オーケー！！」
　こうして、明日肝試しを行うことになったんだが、事態は大きく
動き出していた。

重要な密書が（後書き）

何とか次話投稿でっす。
ようやく終わりの見えてきたこの話。
ラストまでもう少しがんばるぞぉ！！

即停学よ？

七不思議。何処の学校にもある一種の話の種。話の殆んどが先輩や人伝いに聞く話で、信憑性は薄い。

だが、その噂の現場に実際に立ってみると、何となくだが真実味がある。

「高坂〜、マジで出そうだよな、コレ」

公太郎は七不思議のひとつ、血まみれの廊下と言われている廊下の床を見て言う。

「天井とかなんか気持ち悪いよな、ハム太郎」

俺も同じように天井を見て言う。天井は雨漏りのため染みが残ってしまい、その色暈け方などが、血のように思わせる。

曰く、この廊下で一日何時間と残業を強制させられていた教師が血を吐いて此処で倒れていたらしい。

「でもよ、旧校舎が残っている高校って珍しくないか？　今旧校舎壊して新校舎が建つ学校なんて一杯あるぞ？」

馬場が廊下の壁を触って顔をしかめた。多分手が汚れたのだろう。

「オーっ、ニッポンにはやおろずの神と言うのが居ますよネー！きっと其れデース！」

エミリーは始めて入る旧校舎の雰囲気に喜んでキョロキョロと周囲を見渡している。

夕方六時を過ぎた頃合、日が傾き始め旧校舎の廊下を夕日が赤く染め上げる。何となく其れが少し此処の雰囲気を盛り上げている。

「忍殿〜他にはどんな七不思議があるんですか？」

「えっとね、増える十三階段とか、歩く人体模型とか、窓から落ちてゆく人影とかかなぁ、全部思えてないよ」

「ちょっと、ねぇ、もう止めましょうよ、こんな時間に先生にこんな所に居るのばれたら持ち物検査で即停学よ？」

おずおずと付いてくるツンデレ委員長は周囲の人間と早く帰ろう

と促してくる。
「あっはっはーツンデレ委員長今デレモードだッ！」
馬場と公太郎が二人肩を組んでツンデレ委員長を馬鹿にする。
「うっさい、黙れ、ハム太郎に馬鹿ッ！　というかこの子誰よ！？」
ツンデレ委員長は桜花を指差して言う。
「あれ、委員長の友達じゃないの？　俺てっきりそうだと思ってた」
俺はわざと桜花の事なんか知らない、委員長の友達じゃないの、と関係者じゃないということを言って見ると、顔が青ざめる。
「ちょ、私知らないわよ、この子ッ！」
「うっそ、ツンデレ委員長の友達じゃないのッ！？」
桜花の事を知っている公太郎も一緒になって委員長を脅かす。
「知らないわよ知らないッ！　こ、この子七不思議のひとつ、ともちゃん？」
ツンデレ委員長が一歩後ずさりながらカタカタと震えている。
「忍殿、ともちゃんってなんでしょうか？」
桜花がはてなと俺に聞いてくる。内側の胸ポケットに忍び込んでいる霧雨も同じようにつついてくる。
「えっと、確かともちゃんってのはおとなしい子でクラスに友達が居なくて、逆にいじめられていた子なんだ。それで旧校舎で自殺したとかなんとかで、こうやって友達数人で歩いているといつの間にかに居るって霊さ」
「ふむ、となると悲しい霊ですね」
「そうだよね、一緒に居るだけで何にも悪さしないなら特に怖がる必要も無いのにね」
と、俺は委員長を見ながら言う。
「ちょ、高坂君、何フレンドリーに話してるのよ！？　しかもその流れだと私悪者？」
おろおろしながら委員長は言う。が、此処で耐え切らなくなった俺と公太郎は声を出して笑う。
「…ぷっ、あはははは、委員長マジでびびってんの！」

「いやぁ、面白いものみたな！」
状況が把握できず、おろおろする委員長。
「ちょ、なによ、なに！？」
少し泣きそうでもある。
「いや、この子桜花ちゃんっていってな、高坂の従姉妹。今こっちに家の事情できてるらしい」
その話を聞いて、委員長は顔を真っ赤にした。
「ちょっ、馬鹿ッ！　なんでそんなたちの悪い冗談やるのよ、こっちは本気でびびったんだからね、というか高坂君もそういう冗談なんか本気でやらない人って思ってたのに、一番タチ悪いなんて……」
とまぁ俺と公太郎はバシバシ殴られているのだが、委員長は心底ほっとしたような感じがする。
「次はおなじみのトイレの七不思議だけどどうする？」
俺はエミリーに聞いてみる。
「どうしたのデスカー、シノビ？」
「いや、トイレとかってマジで出そうな感じがするからなぁ、旧校舎とかなら尚更」
一同、うんうんと頷く。
俺たちがやっているのは七不思議の探索ではあるが、実際に霊を見ようとかそういうものではなく、噂話の現場をただ歩いてみようというだけなのだ。
まぁ、一番それが危ないんだが。
「じゃぁ次は増える資料室に行くか」
馬場はそう言って上の階を指す。
『おい、コーサカ、増える資料室とはなんだ？』
胸ポッケの霧雨がつんつんと俺をつついて聞いてくる。
「なぁ、馬場。確か資料室の霊ってただ地図帳とかが勝手に増えているって奴だよな？」
「あぁ、そうだな。全くなんで霊が地図帳なんかを増やすのかは疑問だが」

「そういう数の霊ってそんな感じじゃない？」
委員長もドッキリを受けた衝撃から立ち直ったのか、頷きながらそういった。
とりあえず資料室の前まで来たのはいいものの、委員長が思いだしたように口を開いた。
「ところで元々この資料室に何冊の本があるか知ってるの？」
『全然』
一同、同じ意見である。
「それじゃぁ調べたって意味ないでしょーーーッ！」
「なぁ、エミリー他に見たいとこってある？」
エミリーはうーんと悩んで。
「ないデース、それに実際こうやって歩いてみてわかったんデスが、コレ話聞くだけで十分デース！」
思っても言ってはならないことをさらりと言う。
「とりあえず無駄足だったな」
公太郎はそれが当然だとポケットからタバコを取り出し、火をつけた。
「一本もらうぞ？」
馬場も同じように火をつけた。
此処は学校の旧校舎である。
「って、あんた達何公園でタバコ吸うみたいに火をつけるなぁぁっ！」
委員長の言うことは確かに。
「大丈夫、携帯灰皿あるから！」
なんと、公太郎は意外にマナー人である！
「んな事関係あるかーーーッ！」
まぁ、先生もこんなところには居ないだろうしと言うことで二人は歩きながらタバコを吸っていたが、資料室から廊下まで降りてきたときに、
「こら、何しているお前達ッ！」

背後から怒鳴られ、とっさに後ろを振り向くと、教師らしき人物が叫んでいた。
「やべっ、馬場ッ！」
公太郎はそう短く叫ぶとポケットから携帯灰皿を取り出し、タバコを中に入れた。
そして俺達は顔を隠すように旧校舎から飛び出した。

「ぜー、ぜー……ちょ、マジで先生居たじゃない……」
皆一目散に学校外の公園まで逃げてきた。
「ま、マジでビビった……」
委員長は停学になるのかとおろおろしている。
「でも、現行犯で捕まえなきゃならないから停学はないって」
馬場が委員長をなだめるように言う。
「……」
が、それよりも俺はあることが気になっていた。
「なぁ、今日七不思議めぐりしたのは、職員会議で先生が居ないからで、タバコ吸ってるのを目撃して走って来たように思えるけど……」
そう、今日七不思議場所を見て回ったのは先生が放課後会議で居ない事だ。まだ十八時にもなっていない時間帯で先生は会議が終わっているとは思えないし。
それにタバコを吸っているのを目撃して注意しに来たという点では会議室、いや校舎から旧校舎はちょっと離れていてタバコ吸っている人間を見つけるのは至難の業だ。
「……」
皆俺の言いたいことが解ったらしい。
「あんな先生学校に居たっけ？」
「い、いや、殆んどの先生は職員室とか廊下で見るけど、あんな先生は見たことが無い」
皆ぞくりと身体に寒気が走る。

『い、いやぁぁぁぁぁぁッ！！』

即停学よ？（後書き）

遅れましたが更新完了です！
ツンデレ委員長に名前は無いのか！？
学校によっていろいろ七不思議ってありますよね。
ウチの高校は聞かなかったんですけど、中学校にならありましたね。
では、次回もお楽しみに！？

襲撃忍者が出た…

桜花が第二段階終了の突っ込みどころ満載のメールを貰って一週間が経つが変わったことなど何一つなく、いつもどおりの毎日がゆるゆると流れてゆく。

「桜花、霧雨、秋桜ー学校行って来るなー」

いつもの制服に身を包み、俺は家を出る。スニーカーのつま先で地面を蹴り、靴に足を入れているときにかしゃりと何かを踏みつけ、足を滑らせた。

「あぶね、何か踏んだぞ？」

よくよく地面を見てみると、玄関の扉先に三角形の一角を合わせたような妙な形をした紙が転がっていた。

「小学生の遊んだ後か。俺もそうだったけど、小さい子のやる遊びはわけわかんないな」

靴の底でその紙を排水溝の溝まで滑らせる。こうしておけば掃除当番の家の人が捨てるだろう。

しばらく通学路を歩いていると見知った後姿を見つけ、早歩きでその後を追う。

「よ、公太郎」

「うぃーっす、忍」

公太郎と合流し、並んで学校を目指す。

「あ、あのカラス今日も居るな」

「ん？　どのカラス？」

「ほら、アレアレ。コンビニの看板のすぐ近くの電柱に居るカラス」

言われたとおりに電柱を見るとカラスがじっとこちらを見つめていた。

「よく他のカラスとの違い解るよな、俺全くわかんないよ」

「いや、俺も見分けなんてついてねーよ。あのカラスいっつも其処に止まってるんだよ」

「ま、どのカラスもいかにゴミを漁るかを考えて生きてるからね。あの場所だと結構開けてるから餌を探しやすいんだよ、きっと」
都会にしろ、田舎にしろカラスの知恵は恐ろしい。人がどんなに考えてもカラスも、それに対する対抗策を編み出してくる。
まぁカラスの気持ちも解らないではない。こうやって決まった時間に出る残飯などを漁ったほうが楽に食べ物にありつけるし、街にはカラスの食べるような小さな生き物はあまり居ないのかもしれない。
「あ……」
「どうした、忍？」
「いや、其処に落ちてる紙なんだけど、ウチの玄関先にも落ちてたんだよ」
「はぁ？　なにそれ」
公太郎は道の端に落ちていた紙を拾い上げ、見つめる事数秒。
「変なの」
紙を道端に捨てた。
「最近の小学生ってこういうの好きなの？」
「何故それを俺に聞くんだよぅ、忍ぅ…」
そんな話をしながら公太郎と学校へ行き、いつもと変わりない授業を六時間受けた。
「つっかれたー」
放課後の教室で俺や公太郎と馬場は開放感を味わう。
「こんな授業で疲れたーなんて言ってたら社会に出たらもっと苦労するわよ？　別に私の知ったことじゃないけど」
「ツンデレ委員長……それは言ってくれと言ってるようにしか聞こえんのだが？」
「そうそう、ツンデレですよーって言っているようなもんだよ」
公太郎と馬場は一日一回は委員長をツンデレと言わなければいけないようで、毎日のように委員長を捕まえてはツンデレと言っている。

「だから私はツンデレじゃないって！　勘違いしないでよね、あんた達が社会の波に飲まれてもくじけないように……」
「ツンデレ委員長、それ以上口を開くとまたツンデレだって言われるよ、ツンデレなんだからしょうがないっちゃしょうがないけどね」
「貴方も周囲にツンデレツンデレって広めている一角なのにねぇ……」
い、怒りのオーラが見えるような気がする。
超宇宙人１は怒りの力でなったような気がする。で、超宇宙人２はそれを上回る力があると聞いた。
そうか、あの大先生はこの事を言いたかったのか！　怒りのツン。それを越えればとてつもない破壊力をもつデレ！　世の中はツンデレで出来ているんだなぁ。
「何かよからぬことを考えてる気がするわ……」
うぉ、委員長…流石。貴方の周りに黄金のオーラとスパークが見えます……。
そんな委員長の気に当てられたのか、窓の外にいたカラスが鳴き声を上げて飛び去っていった。
「委員長、カラスを気で追い払うとは」
俺たち三人はマジマジと委員長を見ていると、唐突に変な声を出した。
「い、今カラスが…消えたわよ！？」
『……』
馬場が鞄を持って立ち上がる。それにつられる様に俺と公太郎も席を立つ。
「委員長ー。そのネタもう古いぜ、肝試しに行ってもう一週間だぜ？」
「そうそう、アレから何にもあってないし気にするだけ無駄だって」
「じゃ、委員長俺らもう帰るね」
三人並んで教室を出て、扉を閉める。
「ちょっと、嘘なんか言ってないわよ！　だったら調べに行きなさ

いよーーー！　ちょっと、無視するとほんとひどいんだからね！？」
とまぁ、なにか背後から聞こえるけどそれは無視して歩き出す俺ら三人。

馬場達と別れ、家に帰ってくると夕飯のいい匂いがしてきた。
ほんとちょっと前までは考えられなかった事だ。あの日の夜、俺の選んだ道は間違いじゃなかったと思う。
今までいろんな事があって、桜花達と一緒に居る時間は短くても何年分ともいえる思い出が一杯俺の中に残っている。
「お帰りなさい、忍殿。もうすぐで夕飯の準備が出来ます」
「おーう帰ったかコーサカ。何か土産はないのかー？」
「む、馬鹿霧雨、主人たる高坂殿になんと言う言い草、某が誅してくれる！」
この家は言葉使い一つで命はとられません。
で、この秋桜と霧雨は仲が悪すぎる。性格そのものが合わないというか、なんと言うか。
「こーら、霧雨に秋桜、ご飯抜きにするよ？」
『ごめんなさい』
二人同じタイミングでジャンピング土下座。仲がいいのか悪いのか。
「あーそういえば俺まだ全然桜花らの事知らないよ。そもそも忍者の養成所ってどうなってんの？」
桜花は箸を置き何かを思い出すように語りだした。
「まず、未熟な忍者達には第一段階目の修行としてお師匠様が付いて身体を鍛えるのであります」
まて、今まで気にならなかったんだが、何なんだよマジで。忍者が今時必要とされる職とは思えないが。
「色々と突っ込みたいところはあるが…お師匠様ってどんな人？」
そう聞くと桜花はガチガチと携帯のバイブレーションより激しく震え始めた。

「お、お師匠ひゃまは…お、おひょろしい人です…あ、アレは人じゃありまへん！？」
相当ヤバイ人なのだろうか…お師匠様って。というか何語だよ桜花。
そんな気まずい空気の中、桜花の携帯が喧しく鳴り響く。
「珍しいな、桜花にメールか電話なんて」
「そ、そんな、手前はそんなに友達居ないように見えるんですか！？」
「ああ」
「うむ」
「うぬ」
三人とも同じタイミングで頷くと、桜花は体操座りをして地面にの字を書き始めた。
「めめ、メールを見ようよ、桜花！」
慌てて俺達は桜花を元気付け、メールを読ませる。
メールを読むたびに桜花の顔色が悪くなる。まさか絶交メールなのか？
「どうした？」
「は、はい、それが……」
桜花は正座をし、こっちを見つめる。ちょっと目のやり場に困る。
「実は、隣の市に居る私の友達忍者からのメールで、襲撃忍者が出た…との事」
まて、激しく待て。友達忍者、襲撃忍者ってマジなんだ！？　何でもかんでも忍者に結び付けてねェか、おい！？
「とりあえず友達忍者はわかるが、襲撃忍者って……」
「その名の通り、忍者を襲う忍者です。この第三試験や第二試験で出てくるという話で…」
「な、何が目的なんだ、その襲撃忍者は？」
「す、すいません。手前も其処まで知らず、ただ襲ってくるということを噂で聞きましたので……」

皆が桜花に詰め寄る。桜花も其処まで知っているわけもなく、言葉に詰まる。

隣の市でそれが出たとなると、対策を考えなくてはいけないのか？

しゅ、襲撃忍者か！？

ある晴れた日曜日、日々の学業も今日はサボっても文句を言われない一日。羽を伸ばすにはもってこいだ。
「ふぁぁ。おはようー」
寝癖で少し跳ねた髪を撫でながらテーブルに座る。
「お、コーサカ今日はゆっくりだな」
朝から茶とかりんとうを齧りながら朝のワイドショーを見ている霧雨。
「そりゃー学校休みだからねーこんな日ぐらいは昼近くまで寝ていたいよ」
「駄目ですよ、高坂殿。日々いつもと同じリズムで生活しないと」
背後から聞こえる声に振り向くと秋桜が立っていた。
「それは俺より早く着替えて寝癖を整えて言う台詞だと思うけどね」
パジャマ姿で髪の毛の何束かが跳ねている姿で、いかにも寝起きですと言った顔。
そんな会話をしているとき、家の中のある異変に気がついた。
「あっれ、桜花はまだ寝てるの？」
いつもなら皿洗ったり、テレビ見たりしているはずなんだけど今日は姿が見当たらない。
「あぁ、桜花様なら襲撃忍者の備えの為に一度里に戻るみたいだな」
「うっそ、そんな話初耳！」
「一日程度で戻るってアイツ言ってたからまぁ知らせる必要ないって事じゃないの？」
となると、この一日三人で過ごすのか。家の買い物とか行こうって思ってたんだけど。
「じゃー俺着替えたら出るわ」
「コーサカ、何処かに出かけるのか！？」
なかなか食べ終わらないかりんとうを齧りながら霧雨の顔が輝く。

「うん、食料品とか買いにね」
俺は自分の部屋に戻ると外に出かける支度をし、部屋の扉を開けると……。
「うわ、秋桜…何？」
パジャマから着替え、寝癖のついていた髪を既に直した秋桜が控えていた。
「流石に高坂殿を一人で外出されるのは気が引けます」
「っく、秋桜でしゃばるな！？」
かりんとうを抱えた霧雨も俺の部屋の前にやってくる。
「あぁ、わかったよ、一緒に行くよ。とりあえず霧雨がそのかりんとう片付けるの待ちね」
ガリガリと一心不乱にかりんとうを齧る霧雨。まるでねずみだよ。
「準備完了だ、コーサカ！　早く行くぞー！」
と、言うわけで食料品や日用雑貨を買いに街へ繰り出す。
しばらく道を歩いていると妙な紙をまた見つけた。
「あ……」
「どうした、コーサカ？」
胸ポッケに収まっている霧雨が俺を見上げて問いかける。
「あの紙なんだけどさ、最近良く見かけるんだよ」
「！」
秋桜がその紙の下に走る。
「大方小学生の遊びだな、拙者はわかる。全く、近頃の子供のやることはわからん！」
霧雨が腕を組んで何かを納得したように言う。
「高坂殿、コレは式神札です！」
「霧雨……」
霧雨はふけない口笛を吹く真似をして、明後日の方向を見ている。
同士の事ぐらい解ってやれよ。
「式神札と言っても、コレは霧雨とかより何ランクも下で主に動物などになり、情報収拾をすることが主です」

「……」
俺は秋桜を見つめる。
「な、なんでしょうか、高坂殿？」
「いや、秋桜お前すげーな。こんなことわかるなんて」
「い…いえ、そそ、某は……」
すっげー挙動不審になる秋桜。
「ここ、コーサカ…アレは？」
胸ポケットに入っている霧雨が俺の胸を突付き、電柱を指差す。
「……」
其処には、馬鹿が居た。
「霧雨、見ちゃ駄目。馬鹿と何とかは高いところが好きって言うから」
『ちょっとまてーーーい！　其処伏せるの間違っておるぞ！』
電柱上の変な人物は相当の地獄耳なのか、電柱から離れた場所の俺たちの話を聞いていた。
『其処の者ども、しばし待っておれ！』
ふわりと歩くように電柱から足を躍らせる変な人物。
「馬鹿ッ、あぶ……」
口を開いた俺は言葉を失った。
変な人物は重力をまるっきり無視した動きを見せる。
落下するはずなのに、まるで上下する足場に乗っているかのような動きで降下してくる。
「高坂殿、あれは…忍者です！」
秋桜が叫ぶ。
なんだ、忍者ってのは人間じゃないのか！？
「と、とりあえず逃げましょう！　多分奴は……」
「しゅ、襲撃忍者か！？」
俺と秋桜は互いに頷きあい、その場を走って去る。
『ちょっと待てと言っておろう、ちょっと待たんか！』
背後でそんな声も聞こえるが、一切合切無視を決め込むしかない！

『えぇい、式神！』
ちらりと背後を盗み見ると、襲撃忍者は懐から紙を出してそれを舞い遊ばせると、紙は姿をカラスへと変え、俺たちの後を追うように飛んでくる。
「ヤベェ、秋桜！」
「高坂殿、この近くに地下道はありますか！？」
「何でだよ！？」
「多分、あのカラスは攻撃は仕掛けて来ません！　監視用です。アレに姿を見られ続けては逃げるに逃げられません！」
「そういうことか！　オーケー任せろ、こっちだ！」
俺と秋桜は全力で地下道へ向かう道を疾走する。
「な、なんとか撒いたか？」
二人息を切らして地下道の壁によりかかる。
周囲の通行人たちが不思議な目で俺たちを見ているが、そんな事はどうでもいい。
「えっと、あれが襲撃忍者って言うのなら、とうとう此処にもやってきたって事なのか？」
「そのようですね……」
「しっかし、解らんことばっかりだなぁ」
三人で首をかしげてみるが、どうにもなりそうに無い。
「とりあえず桜花と連絡を取って対策を練ろう」
俺は携帯でメールを打つ。携帯を持っていたぐらいだから恐らく里にも電波は届くだろう。
待つこと数分、桜花からの返信メールが届いた。
簡単に訳すると、怪我は無いか、すぐに戻るという内容で電車とバスを乗り継いで帰ってくるだろう。
いや、もう文明がどうのこうのなんて言わないさ。
おおよその時間を予測して、俺たちは地下道から入ることのできるショッピングセンターの中で時間をつぶし、桜花が帰ってくるのを待つ。

待つこと二時間ちょっと。
俺たちは飲食店の隅に陣取り、襲撃忍者の対応を考えている。
「多分、俺たちの家は襲撃忍者にばれていると思う。襲撃忍者の式神の紙っぽいのが家の近くとかに落ちていたし」
「と、なると…逆に家で迎え撃つのは危険かもしれない……」
桜花は腕を組んで唸る。
「桜花、そういえば襲撃忍者用の道具とか貰ってきたんだろ？」
「はい、それが……」
桜花の表情はさえない。まさかだとは思うが、道具がもらえなかったのか？
「襲撃忍者への対応は危ないからやめるように注意を促されました」
「まぁ、当然といえばそうだけどよ…実際に俺たちは狙われているんだぜ？」
「やられるまえにやるしかないな！」
霧雨の一言で皆頷き、体当たりで襲撃忍者に立ち向かうことを誓った。

しゅ、襲撃忍者か！？（後書き）

もう話が訳わかんないって。
襲撃忍者って何！？
もう少しで謎を解明させますんで、もう少しお付き合いお願いいたします。

お、お師匠様！？

唾を飲み込む音がやけに大きく聞こえる。居間には俺一人しか居ない。テレビをつけていつも通り過ごしているのだが、キッチンや隣の部屋には桜花らが待機し、合図を待っている。テレビのお笑い番組の内容も頭に入ってこない。

ちらりと時計を見ると午後七時を回ったところだ。ベランダの手すりの所はカラスが居て、じっとこちらを見つめ置物のように固まっている。この時間カラスを見かける事も少なく、見かけるのが珍しい時間帯にこうして居ると言うことは一つの結論が出てくる。

あのカラスは式神だ。こちらの隙を覗っている。さぁ仕掛けて来い、『居間』には俺一人しか居ないぞ。

『ピーンポーン』

丁度いいタイミングで玄関のチャイムが鳴る。

「玄関か……」

この時間尋ねてくる人間なんて限られてくるし、その可能性のある奴らだって、来る前に連絡ぐらいはよこしてくる。となると……。

「コーサカ……」

キッチンの食器棚に待機している霧雨が刀を手に玄関の方をちらりと見る。

「あぁ、多分奴だ。堂々と玄関から来るってのはまずおかしい、注意して周囲を見ていてくれ」

「承知！」

これほどまでにこの小さい式神が頼りに思えたことはあるだろうか？　いや、霧雨だけじゃない、桜花も秋桜もとっても心強い。

「はーい、今行きますー」

大きめの返事をして、玄関へと向かい、頬を二回叩いて、覗き穴から来訪者を見る。

周囲が暗めなのではっきりと姿はわからないが、とりあえず怪し

い風体をしている。黒いフードのようなもので顔を隠している。間違いない。
「どちら様でしょうか？」
チェーンロックをした状態の扉は数センチほどしか開閉せず、その隙間から来訪者を覗き見ると、時代錯誤な格好をしている。やはり襲撃忍者か。
「わらわは忍びの里の者じゃ。少し話があるんじゃが……」
「なるほど、解りました。少しお待ちください」
扉を閉めると、ロックを外す前に手を一回叩いておく。合図などを決めてなかったのは痛いが、きっとこれで解ってくれるだろう。
「はい、お待たせいたしました。立ち話も難ですし、こちらへどうぞ」
襲撃忍者を家の中に誘い入れる。非情に危ない行為だが、これしか打つ手は無い。
「迷惑をかける」
それだけを呟くと襲撃忍者は俺の後をついて来る。俺が招きいれるのは居間じゃなく、桜花、秋桜が潜む使われてなかった部屋だ。
「では、お茶を持ってきますので、中でお待ちください」
襖を開け、俺は冷蔵庫の前に立つ。襲撃忍者は警戒もせず、その部屋に入る。
『覚悟ッ！』
二人の声が聞こえると同時に俺はその部屋の中へと急ぐ。
「やったか！？」
部屋の中央で桜花と秋桜に組み敷かれた襲撃忍者が居た。よし、上手くいきすぎだ。絶対相手は何か手を用意してある。まずはそれをつぶす事が出来たと思う。
『まぁ、主らがそのような行動を取ることは重々承知じゃ』
映画のボスの登場のように、誰も居ない空間から組み敷かれた襲撃忍者と同じ姿をした奴が現れた。
「高坂殿ッ！」

「忍殿っ！」
部屋の中の襲撃忍者が紙に戻ると、すぐさま俺の前に立つ二人。
襲撃忍者の出現した場所は食器棚の近く。まだ霧雨には気が付いていないようだ。
『全く、人の話もろくに聞かないで……昔っから変わらんのう』
襲撃忍者は腕を組み、俺というより、桜花に近づいてくる。
一歩、また一歩と踏み出すたび、襲撃忍者の顔が何となく見えてきた。頭巾のようなものを被っているが、顔つきは二十代半ば、若しくは三十代ぐらいだろう。
「ま、まさかっ！」
桜花が驚いたような声を上げるのと同時に、食器棚から小さい陰が飛び出す。
「覚悟ッ！」
玩具のような刀を握り締め、霧雨が一直線に襲撃忍者に向かう。
完全に不意を付いたのだろうが、襲撃忍者はコップを咄嗟に手に取り、向かってくる霧雨をコップの中に入れ、逆さまにして机の上に置く。
「な、何をするかー！　これを退かせ、どかさんかー！」
コップの中でもがく霧雨。そんな哀れな式神の姿を見て、こんな船の置物があったなぁ、と小さい頃に見たビンの中に船の模型が入っている物を思い出した。
『ヤレヤレ、とりあえずわらわの話を聞け』
襲撃忍者はそう言うと、頭巾を外すと、桜花が驚いて土下座をする。
「お、お師匠様！？」
はぁ？　お師匠様って言ったよな、というか忍者の師匠ってヤッパリ居たんだなぁ……。

お、お師匠様！？（後書き）

はい、まだ訳がわかりません。
とりあえず次話はいつもの分の二倍ほど長くなりそうです、お付き合いいただき、有難う御座います！

有難うございました。

今思えばおかしな事が多すぎた。もう少し冷静に考えれば解った事なのだが、俺はそれを出来なかった。いや、やらなかった。

本当は質問すべきことが沢山あったんだ。でも、その所為であの非常識的な日常を壊していくのが怖かったから。勝手に互いの間に干渉線を引き、一定の距離以上は踏み込まないようにしていたんだ。

ずっとあの毎日が続くって思い、疑わなくて。まだ沢山やってあげたいことがあった、一緒にやりたい事があったんだ。

全てを知って、大切な日常失った俺は、独り居間でただぼんやりとテレビを眺めている。

今日はお笑い番組の後にクイズ番組のある日で、毎週楽しみにしていた。

先週までは、大して面白くない芸人のコントを見ても、隣で抱腹絶倒状態、虫の息になっている霧雨のお陰で、何倍も面白く感じていた。

だが、今は何回見ても吹き出してしまうようなコントを見ても、何一つ腹の其処から湧き上がってこない。

感情が冷めてしまっている、という自覚が自分でもあるのだから、他人の目に映る俺は相当やばいんじゃなかろうか。

テレビを眺めながら俺は、思い出すのが何度目になるか解らないほど思いかえした、あの日の事をまた思い出す。

そして、俺は後悔する。何でもっと上手く別れの言葉を掛けてあげられなかったんだろう、と。

何度思い出しても、何度考えを振り切っても、俺はあの日に縛られている。

「お、お師匠様っ！？」

桜花はそう言うと、驚きふためいてその場に平伏する。その光景に俺は驚いて桜花に問いかける。
「桜花、お師匠様って……まさか忍者の？」
自分で問いかけておいて何だが、忍者の桜花の師匠がシェフとかだったらそれこそ何を目指しているのか解らない。
「桜花…いえ、美紀さん。もう十分でしょう、上からのお達しで試験は終了しました。十分な結果を残せました、あなた方の結果は十組中、上位に入れるほど良い結果でした」
「いえ、私は……」
チラリと俺を見て申し訳なさそうな視線を向ける桜花。
そんな事よりいつも手前、手前と時代を感じさせるような一人称だったのだが、急に歳相応の喋り方になった桜花にただ戸惑うばかり。
「高坂　忍さん、貴方は十分に試験者として、十分すぎる実績を残せました。これでこのプログラムが動き出す目処もつきましたし、本当に有難う御座いました」
「ちょっと、なんだよ、それ……」
言っている意味が少しも解らない、試験、実績、プログラム、目処？
「美紀さん、貴方が桜花として、最後の仕事ですよ。高坂さんに説明を」
そう言うと、忍者のお師匠さんは立ち話も難ですから、と居間の方に視線を投げて、移動を促す。
「はい、わかりました」
桜花は俯いたまま辛そうにそれだけ呟くと、俺の真正面に座る。
「……」
なかなか喋りだせない桜花。十分間、無言の時間が続く。これほど十分が長く、苦しいものだとは思わなかった。
「忍さん、まず始めに貴方に謝らなければなりません。私は桜花という忍者修行中の身ではなく、株式会社ネクストジェネレーション

という会社の社員です」
本当に申し訳なさそうな表情を浮かべ、桜花は続ける。
「で、でも私、幼そうに見えても、実は今年で二十歳になるんですよ？」
無理をした笑顔、いつもの笑顔とは程遠い笑顔。
俺は桜花の説明も何処か上の空で、しっかりと聞く気になれない。
騙されていたんだ、利用されていたんだ。あの笑顔も、あの毎日も、全て偽りのものだったんだ。
「で、でも、桜花は忍者で、壁抜けの術や、霧雨や秋桜だって忍術で出したじゃないか……それは一体どうやって説明するんだよ……」
そう、桜花は最初のあの日、鍵の掛かっている玄関のドアをすり抜けてき来た、そして一枚の紙から霧雨を出したし、秋桜だって。
「まず、霧雨ですが……」
桜花はなにやら懐からライター程度の大きさのリモコンを取り出すと、霧雨に向け、ボタンを押した。
『……』
ガクリと糸の切れた人形のようにその場に倒れる霧雨。
「お、おい！？」
慌てて霧雨を抱き上げようとすると、もう一人霧雨そっくりな人が姿を現した。
「拙者、霧雨の声の橘　彩子（たちばなあきこ）と申す」
と、霧雨と同じ声、同じ顔の人が俺の目の前に立つ。
「まー私が霧雨やってたから、自分のケリは自分でつけるよ。じゃ、コーサカいい？」
と橘さんは俺のやや右正面に座り、力の抜けた霧雨を手の平に乗せる。
「まず、このちっこい私は、小さいけど高性能ロボットで、私はこのちっこいののモニターを見て、声を出すの。いくら高性能ロボットって言っても、流石に完全自律型なんてまだ作れないからね」
と橘さんは三度、力の抜けた霧雨の身体をいとおしそうに撫でた。

「でも、術で霧雨が出てきたんだ……それはどう説明……」
「コーサカは紙がこの子になるの見た？」
「それは……」
そう、気が付いたらテーブルの上に霧雨が居たんだ、俺は紙が霧雨になるところを見ていない。
唇をかみ締める。元から小さい式神の霧雨なんて居なかったんだ。
「でも、秋桜の場合は俺はちゃんと見た！」
ずっと黙り込んでいた秋桜が口を開く。
「そうですね、高坂さんは私の姿を見ましたが、紙から私に変わる瞬間を見たわけではありませんよ」
「そんなはずは無い！　俺は覚えている、桜花が九字を切って、紙を投げて煙が巻き起こり……」
其処まで言って気が付いた。
俺は煙で視界を遮られ、視界が晴れたら其処に秋桜が居た。
「そう、あらかじめ待機しておいた私は煙で視界が遮られているときに出てきたの。そして、一度外に出て部屋に戻ったのはその証拠を隠したりする為」
「でも、桜花と秋桜の姿は一部分を除いて全く同じじゃないか！」
駄々をこねる子供のように、俺はずっと真実だと思ってきたことを守りたくて、一つ、また一つと言い訳じみた理屈を並べる。
「それもそうですよ、私と鈴村　真紀（すずむらまき）と桜花…いや、鈴村　美紀（すずむらみき）は双子なんだから。まぁ、私の方がミキより……ね」
と桜花を一瞥して笑う。
「マキちゃん……またそれで笑う……」
桜花は秋桜と言わず、マキと呼び、拗ねたような表情を見せる。
「俺が桜花が忍者だって思ったのは、最初のッ！」
「すいません、忍さん……」
カチャリと家の鍵を机の上に置く。
「今回のプロジェクト、高坂　刃さんの協力も得て、予め合鍵を貰ってました……」

全てが壊れていく。俺の日常、俺の大切な全てが。
「そんな……」
俺はただ呆然と自分の手を見つめた。
真っ白で、血の気の無い手。多分顔はそれ以上に血の気が引いているだろう。
「説明としては六十点」
桜花……いや鈴村　美紀の上司たる女性はそう言うと、お茶をすすり、口を開く。
「まず、このプログラム…現在日本では家族同士の会話も無く、非常に由々しき事態です。実際、今の日本の子供の居る家庭は沢山ありますが、その中で家族として楽しくやっている家は限られてきます。とは言っても、家庭の事情で子供と接する時間がなかったりとか子供のアルバイトで中々一緒に食事する事の出来ない家も含まれて居ますが、それはその家の形なんですからしょうがないと言えばしょうがないのです」
「だから、そのプログラムってッ！」
「まぁ、落ち着いてください、高坂さん」
俺を嗜めるように上司さんは二度手を下に振る。
「今全国の家庭相談所には家族、子供との接し方が解らない、家族との溝が深いなど、様々な相談が持ちかけられている現実です。その家などによってそのような相談が出ること事態はそう珍しくも無いのですが、如何せんその件数が異常なのです。そこで、私達ネクストジェネレーションは、そんな悩みを抱える家庭に社員を派遣し、色々なシチュエーションをもって、親や子、兄や弟などが自然に接していける架け橋となりたいのです。ですが、新しく事を始めるには何度もシミュレーションをし、いかなる場合でも対応できるようにしておかなければなりません」
「……」
色々聞きたいことがあるはずなのに言葉にならない。いや、もう全てが面倒なんだ。

「解った。要するに、俺はその様々なシチュエーションにおける、シミュレーションのサンプルなんだな。で、其処に居る鈴村さんや橘さんが俺に掛けた言葉は、全てはマニュアルとか、そんなんに沿った偽りの言葉だったって訳か」
違う、こんな事が言いたいわけじゃないのに。
「はは、俺は馬鹿だよな。そりゃそうだよな、実際に考えれば忍者なんてもんは何百年も前に滅んじまってるしよ。普通に考えれば今まであった摩訶不思議な事なんて、テレビのマジックみたいに仕掛けがあってよく考えれば解ることだったよな」
俺の口からは自分を慰めるためか、それとも、ずっと俺を騙してきた鈴村さんらに対する恨み言なのか、自分でも何を喋っているのかよくわからない。
「こうさ……」
「もういいだろ、帰ってくれ。十分データは取れただろうし」
「こうっ……」
「美紀さん、これ以上は……」
気が付けば真っ暗な部屋の中、独りで俺は天井を見つめていた。
もう、全て忘れてただ眠ろうと目を閉じても、最初に出会った日から今日までの色んな出来事を思い出して、忘れられない。
「騙しただけじゃ足りないってのかよ……」
布団に包まるように横を向き両手で頭を抱え、目を瞑る。

本当に睡眠が取れたのかわからない。
全てが億劫で、学校にも行きたくない。が、一日中家に居たら余計に考えてしまいそうで、なるべく考えないようにするべく、学校に行くことにした。
朝、公太郎と会ったのだが、何を話したかはよく覚えていない。
休み時間、馬場も加わって一緒に飯を食べたのだが、味が全くしなかった。
放課後、なんかエミリーが騒いでいた気がするが、何について騒

いでいたか解らない。
毎日がとても長く感じる。カレンダーを見て、あの日から一ヶ月は経っただろうと思っていたのだが、まだ十日ぐらいしか経ってない。
親父から電話が来ていたのだが、全て無視を決め込んだ。
色あせた毎日はただ面倒だ。
うざったいと思えるほど、俺を心配し、アレコレと話しかけてきた公太郎や馬場も、いつも間にか俺と一歩距離を置くようになり、俺の周りは静かだった。
「ちょっと、高坂君いい？」
委員長が俺の名前を呼び、誰も居なくなった隣の教室に俺を連れてゆく。
「何……委員長？」
「最近どーしたの？　ハム太郎や馬鹿ともあんましつるんで無いようだし、それに何をするにもうわの空で、何にも周りを見てないって感じがするの……」
「そう思うんだったらそうだろうね……」
「な、何か悩み事とかあるなら聞くよ、話して？」
「別に無い……」
それから何度も委員長に質問されるたのだが、俺が抱えていた事を誰かに話す気にもなれなくて、差し伸べられてきた手を何度も振り払っていた。
「馬鹿ッ！」
ぱちんと教室の中に乾いた音が響く。
一瞬自分が何をされたのかわからなかったが、委員長が手を庇うように立っていた事、自分の頬が熱く焼けるように痛かった事で、頬を張られたんだな、と理解した。
「もう、なんで、なんで少しも話してくれないのよ……高坂君がおかしくなって、みんな何処か変わってきちゃってる……もう嫌よ、そんなの！」

委員長はそう叫ぶとその場に崩れこんだ。
「あ……」
委員長のその姿を見て俺は後悔する。
「その、ごめん」
取り乱す委員長。俺と距離を置いた公太郎や馬場。全て俺がその原因を作っていた。
「あの……さ、一つ聞きたいんだけど……急に変な事聞いて、困らせちゃうかも知れないけど、ヤッパリ一人で考えるのはちょっと辛い」
「……」
委員長は何も答えてくれない。が、俺はそのまま続ける。
「もし、自分だけ何も知らされて無くって、ある日突然、実は……って本当の事話されたら委員長はどう思う？」
これだけじゃ解らない。
「そうだ、自分一人がおとぎ話の中に居るってわかんなくてさ、周囲の奴は皆知ってるの。それでも楽しく笑ってやっていた。でも、ある日突然、真実を聞かされるの。それは……どう思う？」
「本当の事を知れたんだから良いんじゃない…？」
少し冷静になった委員長はそう告げる。
「うん、俺も真実を知れて良かったんだと思う、けど……」
「けど？」
「真実を知った後、委員長がその自分だったら、周囲の奴の心が全くわからなくなってしまわない？」
「心って言うと……周囲の人の考えていた事？」
「うん、本当に心から笑っていてくれていたんだろうか、無理して自分に合わせていたんじゃ無いんだろうかって」
委員長は考え込む。俺はそれをじっと見つめる。
「高坂君は楽しく笑うときってどう笑う？」
「楽しく笑うとき……？」
「うん、楽しく笑うとき、高坂君は心の中でどんな風？　凄く悲し

かったり、凄く怒ってたりする？　違うよね、楽しいときは楽しいから笑うんだよね。多分、私はその周囲の人たちも楽しくて笑ってたんだと思う。たとえそれが嘘だったとしてもさ、その自分が楽しかったって事は嘘じゃ無いと思うんだ……って、私何言ってるかわかんないね」

と、委員長は恥ずかしそうにはにかむ。

「いや、ありがとう。そうだよね、相手に嘘つかれてたって、自分が楽しかったことには変わり無いよね、それに、ちゃんと真実も教えてくれたわけだし……」

「なんだかわかんないけど、とりあえず少しだけ力になれたかな？」

「うん、とっても」

そうだな、いくら桜花らと過ごした日々がプログラムどおりだって言っても、そこで俺が笑った事はプログラムどおりに笑ったわけじゃない、俺の意志で笑ってたんだ。貰った思い出は確かに筋書き通りに進んだものかもしれないけど、でも楽しかったのは事実だし、そう考えると……。

「ありがとう、委員長。おかげで色々とすっきりしてちゃんと自分なりに答えを出せそうだよ」

「そっか、それは何より」

委員長はそう言うと、にっこりと笑った。

「さて、俺はこれを片付けますか。全て終わった後はまたいつも通りに毎日を過ごせるようがんばるよ」

「うん、高坂君らしい顔つきになりました。まぁ、その全てが終わった後、いつも通りって訳にはいかないかもね」

委員長は何か意味有り気に笑うと俺の背中を叩く。

「私がここまで力貸したんだから、ちゃんと納得のいく答えを出しなさいよね！」

「痛い、痛い。ま、ヤッパリ委員長はツンデレだったということです」

と、冗談を言うと、委員長は呆れたような笑顔を見せる。

「もういい加減、そのネタ離れなさいよね」
委員長に礼を行って、教室を後にする。
「がんばって」
委員長が何か口を開いたが、よく聞き取れなかった。
そのまま俺は学校を出て、携帯で親父に連絡をする。
「あぁ、親父？　俺だけど。んだよ、もういいんだよ。それよりも……あぁ、そうしてもらえると助かる、また連絡してくれ」
用件だけ言うと俺は通話を切る。

翌日、俺は学校をサボり、ファミレスの椅子に腰掛けて、人を待っている。
待ち合わせは十時。まだ二十分ほど余裕がある。
「高坂さん？」
と窓の外を眺めていた俺の背後から声が掛かる。
「あ、鈴村さんに、橘さん。お久しぶりです」
丁重に頭を下げると、三人は驚いたような表情を浮かべる。
「高坂さん……」
美紀さんが申し訳なさそうに俺の目の前の席に座る。
「忙しい中、時間を割いて頂いて有難うございます、今日は今までのお礼と、十日ほど前の事で謝りたくて」
三人とも黙って俺の目の前に座り、俺の言葉を待つ。
「まず、橘　彩子さん。貴方、霧雨にはずいぶんと楽しませていただきました」
「いえ、そんなことは……」
「実際、こんな妹なら居ても良いかなって思うほどでしたよ」
「そ、それはなによりです……」
ばつが悪そうに頬を掻く橘さん。
「で、鈴村　真紀さん。貴方とはあまり接する時間はなかったんで、もう少し何処かに行って遊べたら、なんて少し後悔してますね。も

っと、時間があったら、あの時こうしていれば、って色々考える事がありますよ」
「私の方も……」
真紀さんも俺と同じ事を考えているのか、何度も頷く。
「鈴村美紀さん。貴方には一番お世話になりました。今考えてみれば生意気なことや何枚目役者かって思えるような事言っちゃいましたが」
「そんな事ないです！」
「俺、凄く後悔しています、今」
三人の顔を一度見渡し、言葉を続ける。
「あの日、本当の事を教えてもらった俺は、恥ずかしい話、皆さんと別れるのが嫌で、そして家族同然だって思ってた皆さんに置いて行かれていたような気がして、素直に自分の思ってることを言えませんでした。頭の中では皆さんと別れる日が来るって言うことは解っていました。でも、それはまだまだ先の事なんだろうなと、思ってましたし」
「高坂さん……」
美紀さんはポロリと涙を零し、俺を見つめる。
たぶん、美紀さんは忍者の桜花を演じて居たんじゃなく、美紀さんは忍者の桜花だったんだと思う。だからこそ、俺よりも美紀さんの方が自分をずっと責め続けていたのかもしれない。
「皆さんが俺と一緒に居てくれたお陰で、微妙に楽しかった毎日がとても面白かったですよ。俺の我侭ってか、願いとしては皆さんも俺と同じように楽しかったら……」
「えぇ、楽しかったですよ！」
「はい、私も」
「危うく自分の仕事忘れそうになっちゃったし」
美紀さん、真紀さん、彩子さんが俺の質問に答えるように力強く答える。それが今偽りか、真実かなんてもう関係ない。楽しいって言ってくれているんだ。

「それは良かった。それで、今日はちゃんとけじめをつけたいです」
「けじめ…ですか？」
美紀さんが泣きながら質問する。
「はい、まだ俺。ちゃんとお礼を言ってません、それを一人一人に言わせてください」
「そんな、私達はお礼を言われる資格なんて……」
真紀さんの言葉を遮る。
「真紀さん、ペンを拾って渡すとき、純粋に拾って渡そうって思って行動する時もありますし、足元に転がってきたから拾うって色々あると思うんですよ、ペンを拾ってもらった本人は、ついでに拾ってくれた人には礼を言いませんか？　それと同じですよ。どんな思惑があろうとも、お世話になった事には変わりないし、俺は皆さんにお礼を言いたいんです」
一呼吸置き、俺はいろんな事を思い出し、胸の奥を締め付ける痛みがこみ上げる。
「真紀さん、不甲斐ない俺の手助けをして頂いて有難うございました」
「そんな……」
ぐすっと鼻をすすり、慌てて真紀さんは下を向く。
「彩子さん、まだ大人になってない俺の話相手や遊び相手になって頂き、有難うございました」
「わ、私も楽しかったし……」
顔を逸らして、表情を見られないように勤め彩子さん。
「美紀さん……貴方にはずっと迷惑をかけてきました。朝ごはん準備してもらったり、買い物手伝ってもらったり。早くに母が亡くなったものですから、俺……誰かに毎日世話してもらうこと……無くて」
最後まで言葉を繋げなくてはならないのに、嗚咽が出てきて、よく言葉を発せない。
「ほんと、ありが…とうござ…い…ました……」

「そんな、そんなこと……」
俺と同じように言葉が繋がらない美紀さん。
「私の方こそ…励ましてもらって、元気を分けてもらって……ほんと楽しい毎日を有難うございました」
四人でテーブルを囲み、それぞれ顔を背け、涙を流した。

「うぉーい、宿題してきたかー！？」
「もっちろん！」
「宿題見せてくりー！」
清々しい朝、教室に入るなり、いつもより早く登校してきていたハム太郎こと公太郎と、馬鹿こと馬場に捕まる俺。
「こーら、ハムタローに馬鹿、いきなり高坂君に頼るんじゃないわよ、ちっとは努力して解きなさいよ！」
俺に縋り付く二人を一蹴するツンデレ委員長。
「だって、委員長に頼んでも見せてくれないじゃんか！」
「そう、エミリーちゃんのはアテにならねーし！」
「オー、ホームワークは日本人もベリー嫌いねー、エミリーもきらいデース！」
「あはは、ごめん、公太郎に馬場。実は嘘。俺もしてきてない。と、言うことで、委員長助けて！」
呆れた表情を浮かべる委員長。
「ちょっと、高坂君まで！？　なんで、みんなそんなにやる気無いのよ、来年は進学か就職で忙しいのよ？」
「だって、まだ来年じゃんかよー」
「俺は今を楽しむ！」
「それはともかく、お願い、高坂　忍の一生に一度のお願い！」
「もう、しょうがないわね、今回だけよ？」
委員長は表情を緩め、脇に抱えるように持っていた数学のノートを差し出してくる。

「うぉ、ツンデレ委員長が高坂にデレでる！？」
「くそ、今度から高坂だけデレ委員長に訂正してやる！」
「ちょっと、それ止めなさいよ！　馬鹿、馬鹿！」
朝から視界の端でスプラッタな光景が繰り広げられているが、今はそんなのに構ってる時間は無い。宿題をしなくては！

全てのケリを付け終わった後、俺や公太郎、馬場の距離もいつも通りになり、俺の周囲はいつものように騒がしい。
しばらく経って、鈴村さんらから手紙が届き、仕事の方も順調のようだ。
今回の仕事は流石に忍者のシチュエーションでは無く、住み込み家政婦として、生意気な女子中学生と日々喧嘩しているようだ。
で、妹の真紀さんは、美紀さんらの報告を纏める事務作業に追われてるとか。暇なときには美紀さんと入れ替わったりするのらしい。身体の問題で、その生意気な中学生に弄れるネタを水面下で与えてると真紀さんは書いていた。
彩子さんは、日々暴走する、中学生と美紀さんを嗜める役割だそうだが、はっきり言って想像できない。
こうして、皆それぞれの道を歩んでゆく。
俺もあの日々を胸に仕舞い、へこんだとき、それを思い出して前に進む力に変えている。
三人も俺と同じように、あの日々が大切な思い出になっていると良いな。

こうして、それぞれが自分の長い道を歩みだしたことで、俺と忍者とのおかしな生活は終わりを告げた……。

有難うございました。（後書き）

長かったこの忍者のお話も終わりでございます。
たった十五話書くだけにドンだけ時間かけてるんだって話ですけど、最後までお付き合い頂いた皆さんには本当に感謝しています。
純粋に忍者のお話で無くて、忍者期待していた方々にはとても申し訳ありません。
結局コメディーで貫き通したこの話、実際はラブコメなのか自分でも良くわかりません。
こんな適当な水無月五日の次回の頭おかしい話にもこうご期待ください！
最後に、くどいようですが、最後まで読んでいただいて有難うございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4292a/

忍者がお家にやってきた！

2010年10月8日14時07分発行